
うさっと！

市川かうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うさつと！

【Nコード】

N7372F

【作者名】

市川かうた

【あらすじ】

兎に捕まった狼が、何か訳ありな兎に預かれて、色々起きていく話。男前兎×眼鏡狼。（ただいま改稿作業と平行して腹黒フェレット×俺様狐も執筆中。改稿中なので前後がおかしいかもしれせん。ご了承を。

第1話（前書き）

この世界の『動物』は、普通の人型に耳と尾が生えた状態だとお考えください。萌えです（笑

第1話

あー……なんでこんなことになっちゃったんだろ……。

僕は目の前で会議を繰り広げるウサギ達を横目に眺めながら首についた首輪を1人で引つかいていた。

ウサギ達の議題は『この狼を誰が預かるか』ってことらしい。

こんなにおいしそうなウサギがいるっていうのに……僕は指1本触れられないんだな……。

そう考えるとちよつと泣きたくなった。

まあ、僕があんなちやちな罠に引つかかったせいだけだよ。

「はあ……」

ため息を吐いて、食べられないウサギ達に視線を向ける。

……食べたいなあ。

発言するたびにみよんみよん跳ねる耳も、黒い瞳も、キーキー喚く声も、全部おいしそう。

ぼんやりとウサギを殺して食べる想像を膨らませながら、僕は視線を泳がせた。

「……ん？」

誰かがこつち見てる。まあウサギなんだけど何故だろう、眼が、金色だ。

珍しい、ウサギはたいてい真つ黒なのに。

単純な興味から、僕はそのウサギを見つめる。すると、向こうとぴつたり目が合った。

どうやらけつこう前から僕のことを見ていたらしい。目が合っても怯える素振りも見せなかった。

ちよつと興味が沸いたから、営業スマイルを向けて手を振つてみる。

……思いつき顔しかめやがった。……このやろつ。

そつえば子ウサギとかは僕が優しくしてあげるとすぐにこつちに来てくれたなあ、ああ、懐かしい。

むかついて、半ば八つ当たりでそのウサギを睨み付けると、不意にそいつは立ち上がったつて議会の中心の方へ歩いていった。

「なんだろ」

眼鏡のフレームを押し上げて、そいつを観察する。

金目のウサギはどうやら議長に何か話しているらしい。…ここからじゃ遠くて聞き取れない。

僕を指差してるところを見ると、僕について何か提案してるらしいけど…。

あ、議長が頷いた。了解したらしい。

議長にまた何か言つてから、そいつは迷わず僕の方へ歩いてきて、僕の首輪に繋がる鎖を掴んだ。

——嫌な予感しかない。

「……君が、僕を預かることにしたの？」

うつわ、このウサギ、近くで見るとかなり柄悪いな、かわいさの欠片もない。

「まあな」

初めて聞いた声もぶつきら棒で、ホント僕の好みじゃない。つていうか、僕は男なんて食べないし見たくもない主義だ。

……やんなつちゃうよ。

「どうせならもっと可愛い女の子が良かった……」

ぼつりと呟きながら立ち上がった僕に、ウサギが鼻で笑う。……

こ、殺したい…！

仕方ないから引つ張られる通りについて歩くと、わらわらと集まつたウサギ達が一斉に距離を置いた。

長い耳がみょんみょん動く。食べたいなあ。

そんな僕に気づいたのか（多分目がやばかったんだと思う）、鎖が若干強く引つ張られた。

「…ちよ、ちよっと！首絞まるでしょ…！」

「ああ？別に今絞め殺したっていいんだぜ？」

にやり、と笑った顔は、ほんとにウサギなのか信じがたいところがある。

「…っ！」

ウサギに気圧されるなんて！……ああ、もう！

怯んだことを気づかれなくて僕は、わざと大きく舌打ちしてウサギの隣に並んだ。

……ていうか、このウサギ、僕よりデカいとか、…おかしいですよ。

「君、ホントにウサギ？色々規格外すぎるんだけど」

「てめえが狼のくせにちっせーからじゃねえの」

こっ、この野郎！人が気にしてゐることを！

にやにや笑うウサギに僕は終始イライラしながらこいつの家まで連れていかれたのだった。

……ほんと、信じらんない。

n e x t .

第2話

ウサギの名前は、メア、というらしい。家についた時に聞いたのだが、なんとも珍しい名前だ。

普通ウサギっていうものは『朔太郎』だの『幸子』だのだった名前が多いっていうのに。

こいつはもしかしたらウサギじゃないのかもしれない、と真面目に考えていたところ、僕の名前を聞かれた。

正直な話、自分の名前なんて覚えてない。

偽名ばっか使ってたし、などとうんうん唸りながら考えていたら、メアがため息を吐いて呟いた。

『じゃあお前、小次郎な。』

……………。

僕はもちろん、断固反対して、それから大喧嘩して（罵って物を投げ飛ばし取っ組み合いまでした。初日だったのに……）、結局、僕の名前は「蒼巳」^{あおみ}に決まった。

理由は特にない。偽名の中でもただなんとなく気に入ってたっただけで。

そうして名前が決定してひと段落ついた後に、メアはなんと僕の爪を切った拳句に歯を削った。……最低だ！ 虐待だ！ 獣権無視だ！

しかし捕虜の身なので何もいえない。丸くなった爪と歯を見つめて、僕は心の底からため息を吐いた。

鎖に自由を奪われるのとどっちがいいか聞かれたらこっちのがマシだ、ということにしてあきらめたのである。

伸びるのを待てばいいよ、と思っていたら『伸びたらまた切るかな』とか抜かしやがった。泣きたい。

それから、僕はウサギに風呂にぶち込まれててつきとーに洗われた。僕の自慢のキューティクルがボロボロだ。

一人で入れるよ、と叫んだら、しれつとした顔で『水を無駄使いされると困るんだよ』だと！僕はそこらへんの小猿か！

これにはホントにムカついたから、僕は1つしかないと確認済みの寝室のベッドに思い切りダイブして一人で占領してやった。

そんな餓鬼くさい仕返しをした僕を尻目に、風呂から上がったメアは一人で喧嘩で荒れてしまった室内を片付けてた。

ちよつと悪い気分になった。ちよつとだけ。

けれども、メアが寝室に入っただけのため息を吐くころには、僕はすっかり夢の中にいたのである。

狼の罪悪感なんて、長続きしない。言い訳するならそれ。

起きた瞬間、僕の大好きな肉の匂いがしたから、少しの時間呆けていた。

なんでウサギの家で肉の匂いがするんだ。

寝室から出て、簡素なテーブルが置いてあるリビングまで行くと、メアが小鳥を焼いてた。

「……何、それ」

なんでウサギが小鳥焼いてるんだ。この光景はおかしいでしょ。

こいつホントはウサギじゃないだろ。なんか別モンだ。絶対そうだ。

「鳥」

「いや、それは分かるってば。……なんでウサギが小鳥焼いてるの」

「これはお前用。俺はサラダ食べるから」

……。

呆けたままの僕の前で、テーブルに小鳥が3匹のった皿が置かれる。その皿の向かいにサラダを置いて、メアはそこに座った。

シンプルなフォークがサラダを刺す。やっぱりウサギだったな、とかちよつと考える。

「……えーと……」

柄にもなくおろおろとしている僕に、メアは若干眠そうな顔で言った。

「座れば」

「あー…うん」

僕は小鳥の置いてある方へ座った。小鳥3匹かー……お昼まで持たないだろうな。

そう思いつつも食べたくないわけではないので、僕は素直に小鳥を掴んだ。

「待った」

「何？」

食べようとした瞬間に言われたもんだから、僕はちよつとムつとしながらメアに視線を向けた。

目の前にフォークとナイフが差し出される。あー、手掴みはダメってことですかい。

「僕、それ使ったことないんだけど」

狼がそんなの使ってたらずくに獲物取られちゃうし。

「…マジ？」

使ったことがない。ってことが信じられないらしく、メアは若干呆けていた。

僕はまだ眠いので首を縦に動かすだけにする。……あ、顔洗ってない。洗いたいな。

「あー…、じゃあ後で教える」

「……ん」

わざわざ教えてくれるとか、…意外に親切？

そんなところをばーっと考えながら僕は小鳥をばりばりと食べていた。

塩味うまい。でも量が少ない。

頭と骨と足だけ残した小鳥相手にそんな感想を抱きながら、僕は1匹食べ終えた。メアが若干目をそらしてる。

やっぱりウサギには辛いもんがあるんだろうか。

そう思いつつもお腹が空いてるので2匹目も食べた。あんまりお腹に入った、って気分にならない。

しかも歯のせいで食べにくい。…ちくしょう。

なんとか3匹目も綺麗に食べ終えて、僕は皿の上に骨を置いた。

「……もつと食べたい」

思わず呟いた僕に、メアが一瞬固まる。その後のため息。

「昼まで我慢しろ」

「……ウサギ食べたい」

「断固拒否」

黙々とサラダを食べ続けるメアに、僕はふと考えた。

「ねえ、それおいしい？」

「はあ？」

僕が指差したのは、メアが食べてるサラダ。狼がサラダ食べるなんて変な話だけど、この際しょうががない。

餓死したら洒落にならないもん。

「……俺は、美味しいと思ってる。けど、てめえにゃ不味いだろ」

「ふーん……ちよつと頂戴」

メアが渋い顔して僕を見つめた。眠くなってきたから骨の乗った皿を脇に避けてテーブルに突っ伏す。

片手をメアに差し出した。

「その葉っぱちよつと頂戴」

「……ったく、ほらよ」

僕の手の上に葉っぱが乗った。……あんまり美味しそうじゃない。まずにおいがね、ちよつとね、ないよね。

小さいそれを、更にちぎって口に運んだ。メアがそんな僕をちらっと見る。

……………間。

「につがーい！」

ざらざらして苦くて、美味しくない！ むしろ不味い！

そんな風に不満たらたら顔をした僕に、好物をけなされたメアは怒ることなく鼻を鳴らした。

「ばーか」

メアがにやにや笑って僕から葉っぱの欠片を取る。僕は軽く涙目だ。

「ウサギってそんな不味いもの食べてるの？」

「うっせー、俺からすりや狼が俺ら食うほうがおかしく見えるぞ」

「変なの！ ウサギは美味しいのにウサギが食べてるものは美味しくない！」

口の中の苦味に耐えるために何回も唾を飲み込む僕の目の前で、メアが少しムっとした。

ウサギからしたらちよつと頂けない一言だったんだろう。なら、僕なんて預からなきゃいいのにとちよつともややしながら思う。

「ごちそーさま。ほら、皿貸せ」

「んー」

言われた通りに皿を渡すと、メアは若干視線をそらしながらそれを片付けにいった。

すっかり丸くなった爪で、こっこつとテーブルを叩く。

顔洗いたいけど、正直ちよつと食べたらずれだけで眠くなってきた。

メアは外に行ったみたいだから、帰ってくるまでちよつと寝ちやおう。

そう思って、目を閉じた。

n
e
x
t
.

第3話

暖かい日差しの中でうたた寝していた僕は、扉が開く音で目を覚ました。

メアか。

うつすらと目を開けると何も乗っていない綺麗な皿を持って、メアがリビングまで入ってくるのが見える。川で洗ってきたのかな。

ぼんやりとしたまま身体を起こすと、メアが僕に視線を向けた。眠そうな僕の顔を見つめて逡巡してから、ぼそりと呟く。

「……顔洗いに行くか」

「うん、良いけど……どこに？」

「近くの川。ついでに木の実取ってくる」

目を擦りながら僕は無意識に耳をぱたぱたさせていた。これをやっている時の僕は結構上機嫌だ。

メアが木の実取りに行くことは、やっぱりそこにはウサギがいるってことだから、これは機嫌が良くならないほうがおかしい。

見てない時にちよつと殺っちゃえば、なんとかなるよね。うんうん、なんとかなるなる。

そんなことを考えて堪えきれずににやけ始めていた僕を見て、感づいたらしいメアが眉をひそめた。

「言つとくけど鎖つけてくからな」

渋い顔をされて付け足された一言に地団太を踏みたくなる。ちくしょう！

だいたい僕はどうしてこんなウサギの言うこと聞いているんだ。ウサギなんて僕らの食料じゃないか。言うことを聞く道理なんてどこにもない。

しかしそうは思っても、本能がこいつに反応してるんだからどうしようもないんだけど。

こいつホントにウサギなのか？ 一応、草食べてたけどちょっと怪しい。

「ほら、行くぞ」

そんな風に悶々と考えて小さく唸っていた僕の前で、メアが小さい籠を持つてため息を吐いた。

小振りの、蔦で編みこまれた籠はおそらく手作りなのだろうけど、はつきり言つてメアが持つには少し似合わない。あまりのアンバランスさに笑いそうになるくらいだ。

「あ」

実際、小さく笑いかけた僕だったのだが、ふとあることを思い出して辺りを見回した。

「？ なんだよ」

「眼鏡！ どこに置いたんだっけ？」

僕の上げた声を聞いて首を傾げたメアに叫ぶように返して、誰に聞くつもりもなく問いかける。

何か視界がクリアだと思ったら黒縁の眼鏡が顔になかったのだ。

気づくのが遅れた遅れたのは、その眼鏡が完璧にお洒落用でまったく度が入ってなかったから。

別になくとも困らない代物だけれど、一応僕のトレードマークみたいなものだから無いと少し落ち着かないのだ。

そんなわけで眼鏡を探して腰を屈める僕に、メアは眉を寄せながら呆れた声を出す。

「眼鏡だあ？ なんでんなもん狼が持つてんだよ。あれは梟とかミズクとかが昼間かけるもんだろ」

「眼鏡かけてると優しそうに見えるんだよ。獲物が寄ってきやすいの」

実際に眼鏡をかけだしてから僕の狩猟率は格段に上がった。追いかけるだけの狩りじゃなく、誘い込む狩りが上手くなったのだ。

そういう意味では、眼鏡は僕のお守り、更に言うなら運氣アップアイテムになっていると言えなくもない。

四つんばいになって家具の隙間やソファの下を見てみる。思えば昨日の大喧嘩から見当たらないから、そのときに無くしたんだ。

「……あんまり時間かけんなよ」

そんな僕を見てため息を吐いたメアは、やれやれと小さく呟いて壁に寄りかかる。

どうやら待つてくれるつもりらしい。まあ、見張りのためだろうけどさ、なんて捻くれた受け取り方をして搜索を続ける。

怪しい、と感じた奥の方が良く見えないソファの下へ手を入れて奥のほうへ伸ばしてみると、思ったとおり覚えのある硬質感に指が触れた。

「あつた！ 眼鏡！」

お守りの意味があるそれには少し掠り傷がついてしまっていた。けれどもレンズではなくてフレームの方についてるだけだから、これも思い出、とよく分からない納得の仕方をして埃を払って眼鏡をかける。

ガラス一枚越しの世界は見慣れたもので、僕はひとり満足げにならずいた。

「見つかったよかったな。祝いにこれつけてやるよ」

ぶつきら棒な皮肉の言葉に振り返ると、器用にも片眉を上げたメアがその手に持った鎖と首輪を鳴らした。……そんなお祝いはいいない。

それでも逆らうわけにはいかないので、僕は捕まった犯罪者よろしくすごすことメアの元へ歩いていくのだった。

狼なのに……僕、狼なのに……強くてかっこいいのに……。なんでウサギに負けてるんだ……。

重苦しい音をたてながら揺れる鎖に首を繋がれて、僕はメアと川

まで三十分かけてふたりして歩いてきた。

暖かい太陽と、そよ風。その光を受けてきらきりと輝く小川。穏やかで美しい、申し分ない景色だとは思う。情緒的で素敵だとも思う。

が。

「なんで一匹もウサギがないの!？」

そこは見渡す限りの美しい景色、そう、美しい景色『しか』なく、可愛い女の子どころか糞餓鬼一人すらいなかったのだ。

殺風景な光景にシヨックを受けている僕の隣で、鎖を外れないように木に繋げながらメアが鼻で笑った。

「てめえを預かった俺が普段使う場所に、ウサギが来るわけねえだろうが」

「そ、そんなあー…」

その場につくりと膝をつく僕を見て、つなぎ終えた鎖から手を離れたメアは更に笑う。

丸くなった爪でも良いから引っかけてやろうともがいたが、悔しいことに鎖のせいで稼動範囲が狭くて届かなかった。

「ばーか」

「馬鹿って言うほうが馬鹿なんだよ、知ってる?」

「っていう方が馬鹿だったりするよなあ。そういうこと言う時点で馬鹿だけだな」

「……………」

押し黙った僕が面白かったのかメアはけらけら笑った。口でも勝てないなんて悔しいにもほどがある。

むっと頬を膨らませた僕が、不機嫌まではいかないまでも拗ねているのが伝わったのか、メアは口に出して笑うのはやめてくれた。

それでもまだにやけた顔のままで少しむかつく。言ってもしょうがないので言わないでおくと、落ち着いたらしいメアは一息ついてから僕の近くにあった大きな葉っぱを箸り取った。

そうして、その葉っぱを少し折り曲げる。

「……何してるの？」

「見てりや分かる」

目的が分からなかったので聞いてみたがメアは具体的には答えてくれなかった。

その代わりに実演してくれるのか、折り曲げた葉っぱを持ったままメアは離れた場所にある川に向かっていく。

見てれば分かるらしいので言われた通り眺めていると、その大きな葉っぱを持ったまま川の手前で屈みこんで、それを綺麗な流れの中に沈めるのが見えた。

「あ、なるほど」

僕の見ている前で、大きな葉っぱにいっぱいの水が溜まる。引き上げたそれを零さないように持つてきて、メアは僕の前に座った。

「下流にも使ってる奴がいたら困るから、こーやって使う分だけ掬うんだよ。顔を洗うだけならこれで足りる。洗濯するなら桶持つてく、って感じでな」

「じゃあ冬になったらどうすんの？」

「桶持つてく」

「なんで夏はそうしないの？」

「だって面倒くせえだろ？ 使えるもんがあるのに使わねえのはもったいねえし」

へえ、と思わず感心して息を零せば、メアはちよつと照れくさそうに目を逸らした。

あ、なんだ別に悪い奴じゃないのか。なんて、その顔を見て思ってしまった僕は急いでそれを打ち消す。ウサギに良いも悪いもないっしょ！ 餌だから、餌、ね！

それでも、少し照れているらしいメアの顔を見ると、もやもやとした何かが沸いた。なんだろうこれ、分からない。そう、頭を捻ろうとした僕に、メアが葉っぱを差し出したままぶつきら棒に言った。

「早く洗えば？」

「あ、う、うん」

ずっと持たせたままじゃ流石に罪悪感だつて沸く。

僕は葉っぱの中の水を両手で掬って、ばしやりと顔にかけた。少々冷たすぎる気もするけれど、良いか悪いかで聞かれたら、心地いい。

「ばしや、と何度か水をかけると、さっきより随分目がぱっちりした。

「ふう、ありがと」

「おう」

眠気が吹き飛んで意識がはつきりしたところで、勢いが余りすぎたのか少し耳にかかってしまった水を落とすために両耳をふるふると振った。

水しぶきが少し飛ぶ。耳が濡れているのは少し落ち着かない。尻尾は別に濡れても構わないけど、耳はなんというか、ぞわぞわするというか、不愉快の一步手前ぐらいの勢いで落ち着かないのだ。

そんな理由で耳をばたばたさせていた僕は、ふと前方からの視線に気づいて顔を上げる。

そうして目の前を見ると、さっきまで目を逸らしていたメアが無駄に輝いた目で僕を見ていた。

「な、なんだ、一体どうしたっていうんだこのピュアな目の輝きは。」

「えっと、……メア？」

「ん？」

引きつった笑みを浮かべつつ呼びかけみると、普段より幾分かトーンの高い、弾んだ声が返ってきた。

「なんだというのだろう。何がここまでメアの態度を変えさせたって言うんだらうか。」

「わけが分からないまま、目の前のメアの顔を見つめ返す。相変わらずその目はきらきらと輝いたままだ。」

「……その、あの、……何？」

「何が？」

「え？ いや……だから、その……」

「何だよ、はつきりしろよ」

はつきりしろって言われてもですね、どちらかと言えばはつきりした答えがほしいのは僕のほうなんです。はつきりきっぱり、その不可解な目の輝きの理由を教えてください……。

あまりにも純粹な瞳の輝きに耐え切れず、僕はくくりつけられている木に向かってつい後退った。

得体の知れない何かに怯えた僕の耳が、へたりと頭に向かってたれるのが分かる。

そして、その瞬間、メアの瞳の輝きが一気に増した。な、何！何なの！？

泣きたくなってきた僕は、ふと、思い当たることを発見して、一瞬動きを止めた。

もしかして、と、想像上ではあるが発見した心当たりを試すべく、気持ちを固める。

「その、メア？」

「だから何だよ」

きらきらと輝くメアの金色の瞳は、僕がたった今気づいた仮説通り、僕の耳に釘付けた。

しかしいかんせん確証がない。確証がないまま言ってしまったて恥ずかしい思いをするのはいやなので、僕は気合をいれて「それ」を実行することにした。どっちも恥ずかしいことに変わりはないのだがそこは今どうしようもないので放っておく。

さあ、気合だ。

大きく深呼吸をした僕は、プライドも羞恥心も（捨て切れなかったが）捨て去って、意図的に自身の耳を、ぱたぱたさせた。

「おー……」

メアの、気の抜けた歓声が響いた。

え、なにこれ超恥ずかしい。

「ぼ、僕の耳がどうかした？」

あまりの恥ずかしさにちよつと耐え切れなくなって大きな声で言

つてみると、メアはきょとんとした顔で目を数回瞬かせた。

「え？」

——無自覚！

僕は恥ずかしさを誤魔化すためにわざとらしく呆れたため息を吐いて、もう一度、今度ははっきり分かるように言ってやった。

「さつきから凝視してるけど、僕の耳が何か？ 耳なら君にもついでるでしょ」

「え、あ……、そんなに見てた……か？」

「……うん」

誤魔化したものの、メアが恥ずかしそうにいうもんだから僕までまだ恥ずかしくなってきた、赤くなりつつ答える。

そんな僕に申し訳なくなつたのかメアは小さくごめん、と呟いてから手に抱えていた葉っぱを置いて口を開いた。

「なんか珍しかったから、つい見ちまつた」

「め、珍しいもなにも、耳ぐらい皆ついてるよ……？」

「ウサギの耳は見慣れてる。でも、狼の耳は見慣れてない」

「……そ、そりゃね。そうだけどさ……それでも普通は見たりしないと思うけどなあ」

しかもそんな輝いた目で見つめるなんて、ちょっとおかしいよ。

口には出さなかつたけれど言外の声が少し伝わったのか、メアはそつと目を伏せて、少しだけ寂しそうな顔をした。

なんだか、僕が悪いことをしたような雰囲気になっちゃっていい。

別に傷つけたくて言つたわけではなかったので、何か弁明しようかと唇を開けたのだが、丁度そのとき、そこにかぶせるようにしてメアが言葉を紡いだ。

「……お前はさ、ウサギの耳とか見て、食欲以外の感情とかもたねえの？」

「え？」

「仲間のを見るのと、同じ感情を持つことは、一生ねえのかな」

本当に、本当に寂しそうに呟く姿は、なんだかメアではないみたいに見えて、胸がちくりと痛んだ。

「……メア」

そっと呼びかける。

そこに他意はなかったのだけど、メアにとってはそうではなかったらしく、彼はその金色の瞳を大きく見開いてはつとしたようにこちらを見やった。

そして、揺れる金目を誤魔化すように笑みを浮かべる。

「悪い、忘れてくれ」

「は、ちょ……メア、」

「俺はお前らの耳とか触ってみたいって思うけど、お前らはそうじゃないもんな」

そう言って、少し眉を下げて笑いなおしたメアは、木の実を入れるための籠を抱えて立ち上がった。

急いで見上げてみるものの何もいえなくて、僕は間抜けに口を開いたままくりと踵を返すメアを引き止められずに見送ってしまった。

俺はお前らの耳とか触ってみたいって思うけど、お前らはそうじゃないもんな。

先ほど言われた言葉が、頭の中でゆっくりと再生されていく。

「謝ったほうが……いいのかな」

直接ではないにしろ傷つけてしまったのは事実だ。あのメアがある顔するぐらいなんだから、それなりの理由で傷ついたんだろう。だったら僕は謝るべきなんじゃないのか。

なんて、そこまで思った辺りで、僕は自分の立場を思い出してそ

の考えを頭から追い出そうと頭を振った。

なんで僕があいつに罪悪感なんて感じてるんだ！

だいたい向こうが勝手に言ってきた、勝手に落ち込んだんだろう？ 僕は悪くないじゃないか、そう………じゃないかも、とはやっぱり思ってるんだけど。

ひとり唸りながら考えていた僕は、ほとんど何も削れなくなった爪でそこら辺の木の棒をかりかりいじって気を紛らわせることにした。

「……ウサギの耳、ねえ……」

そんなもの、今まで獲物を狩る時の目印ぐらいにしかしてなかった。

ちよつとだけ気になって、僕はひとり黙々と木の実を取ってるメアをちらりと見やった。うわ、耳がへたれてる。

別に常時真っ直ぐに伸びているわけではないから、メアの耳がへたれていたって全然おかしくないことじゃないのだが、今だけはへたれている耳に心が痛んだ。

再びもやもやと込み上げてきた罪悪感を押さえつけるようにして、僕はメアの耳を観察してみる。

普通のウサギの耳っていうのはふわふわで白くて、先の方は丸い。他のところはどうか知らないがこの森では共通で丸くて白い。当然メアも同じで……って、アレ？ 丸くない……？

「お、おかしいな」

ウサギの耳って先は丸かったよね、あんなに尖ってなかったし……ていうか、あそこだけ毛色が違うくないか？

この森の外には、そういう風に耳の形状が色々あるウサギとか、他にも珍しい動物もたくさんいるって聞いているけど、あくまでメアはこの森の住人だ。

ここからずっとずっと離れたミミズクのおじさん（っていうと怒るけど）のところからでも外が見えないんだから、外から入ってきたってことはありえなくはないがかなり可能性が低いし、今のところ

る、外から入ってきた動物はなんとかつていう外国からの動物だけだったらしいから、それは必然的にありえないことになる。

それなのに、どうしてメアの耳は他のと違うんだ？

「もしかしたらあの規格外の身体となんか関係あるのかも」

突然変異種とか。……まあいいや、今度聞いてみよう。

そんな風に考えて、自由になれる限りでその場にごろりと横になった。そのとき。

「おにーちゃん、ひとり？」

ん？

この丸くてふわふわした耳は、ひょこひょこ動く、見慣れた耳は、もしや。

僕は鎖の音を響かせながら慌てて起き上がって、声をかけてきた少年を見つめた。

ふわふわした耳、真っ黒のきらきらした瞳！間違いない。正確に、少年が何者なのかを認識した僕は、にやけそうになる顔を慌てて正し、浮かべる表情を微笑みに摩り替えた。

「うん、ひとりだよ」

少年は、見まごうことなく子ウサギだった。

白い耳を揺らして、かわいらしいデザインの服をまとって、つぶらな瞳で僕を見つめている。

「あのね、僕もね、ひとりなの。おかーさんがどつかいっちゃったから……」

「そっか。じゃあ、お兄ちゃんが一緒に探してあげようか？」
「ほんと？」

僕が人畜無害そんな笑みを浮かべてにこにこしながら言うと、子ウサギはすぐに寄ってきた。ああ、おいしそう。

もうすぐでこの子を八つ裂きにして食べれると思うと、せっかく作った微笑がただのにやにやになりそうだった。

しかし僕は下品な狼と違って上品なので、なんとか微笑を維持したまま少年に笑いかける。

「うん、探してあげる。でも、その前にお兄ちゃんとおそ……」

——あ痛ッ！」

遊ぼうか。と言いかけた瞬間、僕の上に固くて重いものが思い切り乗った。というか、振り下ろされた。

がつん、と音がしたからもしかしたらコブになるかもしれない、なんて心配していると、今度は声が振ってきた。

「何してんだよ」

上から降ってきたのは、不機嫌なメアの声。どうやら頭に乗ったのは籠らしい。中身が詰まっていると籠でも凶器になりうるというわけだ。

そろそろと、窺うように上を見上げると、眉間に皺を3本も寄せ、メアが僕を睨んでいた。

ちよつと真面目に怖い。体まで強張ってしまつて情けないが、仕方ない、これも本能だ。

あとで怒られるに違いない、と思いながらメアから視線を逸らしたそのとき、引きつった声が森に響いた。

「ユキ！？ どこにいるの——っ！？」

子ウサギと同じ亜麻色の髪を靡かせて走ってきた女性の声に反応して、少年が立ち上がる。

「おかーさん！」

どうやら子ウサギの母親が来らしい。真つ青な顔で走ってくる女性は少年まで駆け寄って、その体を抱きしめた。

「ああ、良かった……！ ここに来ちゃ駄目だって、言つてたでしょう……」

我が子の無事に安堵の表情を浮かべていた女性だが、身体を離してから僕と目が合うとびくりと跳ねた。

しょうがないな、狼は怖いもの、と思って笑顔を返しておいたのだが、問題はその後だった。

僕から目を逸らした女性は、次にメアを見て、その顔を走ってきた時よりも更に真っ青にしたのである。

「？」

僕は狼だから分かるけど、メアはウサギだろう？　どうして怯える必要があるんだ？

「あ、あの……」

見間違いかとも思ったのだがやはり彼女はさっきよりも更に青ざめてメアを凝視している。

メアはそんな女性に何を言うでもなく冷たく目礼して、片手で木に巻いていた僕の鎖を外した。

そのまま催促するように鎖を上につ張られたので、よく状況が分からないながらも立ち上がる。

未だに何か言いたげにこつちを見つめている女性に見向きもしないで、メアは小さく「行くぞ」と呟いて僕の鎖を引っ張った。

なんか逆らえる状況じゃないから、僕も黙って従う。

振り返ると、真っ青な母親の隣で子ウサギが無邪気に手を振っていたから、僕は営業スマイルで手を振り返しておいた。

背の低い草むらを無言で突き進む。…ちょっとこの空気、耐えられないんだけど。

僕は進むメアの後ろで落ち着かないままあっち見たりこっち見たり、爪を弄ったりして気を紛らわせていたけど、そろそろ限界っぽい。

さっきのことが気になってしょうがないのだ。好奇心は猫をも殺すらしいが、僕は狼なので良いだろう、と口を開くことにする。

「あ、あのさ……」

「聞くな」

しかしそれは問いになる前にメアの冷たい声にばっさり切られてしまった。

「え？」

「さっきのアレ、なんでもねえから。気にすんな」

なんでもない風には見えなかったんだけどな。僕の気のせいじゃあないだろう？

でもまあ聞かれない話とか、話したくないことなんて、結構ある。会って一ヶ月にも満たない僕に話せるようなことではないんだろう。

僕だって、話してないことはいっぱいある。話す必要がないからだ。

「じゃあ、気にしないことにするけどさ。ちょっといい？」

「なんだよ」

メアはまだ振り向かない。僕と話すときは大抵向かい合うのに。そうでなくても目を見てくれるのに。

「あのね」

くそ、そんなんじゃないじゃないか！

ああ、でもそろそろ限界だし……でもこんなこと言える雰囲気じゃないのに……！

「だから、なんだ……」

ぐーきゅるる。

痺れを切らしたメアが振り返ると同時に、今まで鳴るか鳴らないかの瀬戸際だった僕のお腹が鳴った。

「……えーと、うーんと……その……」

恥ずかしくて俯いていると、俯いていた視界で、メアがお腹を抱えているのが分かった。

……目線をあげてみると、肩も揺れてる。ひどい、人が気を遣って言えなかったのに笑うなんて！

「ちよつと！ 笑うなよ、馬鹿！」

「いやっ、だつてなあ……ぶふっ！ ぶ、くくっ」

とうとう声に出して笑い始めるメアがあまりにもおかしそくに僕を見るから、僕はとんでもなく恥ずかしくなってしまった。

「わ、笑うなああああ——ッ！！！」

結局、メアはその後ご飯のときに大笑いしながら僕に大きな魚をくれた。

生理現象の何がそんなに面白いつていうんだ！ メアだつてお腹空くくせに！ 魚つて、そんなんじゃ誤魔化されないぞ！

まあ、メアが元気になったみたいで良かったんだけどさ。い、いや、別に良くはないけど……！ 良くはないけど良い、みたいな！

訳分かんないよね……僕も訳分かんない。

けど悔しいのと恥ずかしいのはホントだから、腹いせに今夜もベツド占領してやります。

n
e
x
t
.

第4話

次の日、僕が目覚めはすごぶる悪かった。

昨日爆笑されたせいだ。くそお。

寝室から出て、リビングへ向かう。メアはもう起きてて、また小鳥を焼いていた。

あ、5匹になってる。

「……おはよー」

若干食事の量が増えていたことに喜びを感じて、僕は少し上機嫌で声をかけた。

その瞬間、メアが振り向く。その顔は明らかに『驚いてます』って顔だった。

……何？

「どうかした？」

不思議に思っただけ、メアは戸惑ったように視線を泳がせて、
「なんでもない」と小鳥に向きなあった。

僕、何か変なこと言ったかな。…まあいいか。

今日はどうやら塩味じゃなくて醤油らしい。良い匂い！

ところで、顔を洗いたい。

「ねー、メアー」

「ああ？」

メアがフライパンを動かしながら返事を返す。醤油が熱で弾ける

音が耳を撫でた。

「顔洗いたいんだけど…」

「…あー、風呂場に桶がある」

「へ？使っていいの？」

昨日はわざわざ川にまで連れて行ったのに…。ま、使えるならいいけどさ。

「好きにしるよ」

「あ…じゃあ洗ってくる」

若干不思議に思いつつ、僕はフローリングの上をぺたぺたと歩いていった。

少し行つた先の扉を開けると、貯水用の高い桶と、その脇に小さな桶があつた。…小さい桶使えてことね。

僕は小さい桶を手にとると、少し（いや、かなり）背伸びして大きな桶から水を汲んだ。

「ん、つしょ」

い、意外に重いな……つて！

「うわっ！？」

一瞬ぐらついた僕は、そのまま桶の重さでバランスを崩して、

転倒した。

がんっ！

とか、結構すごい音がして、僕の目の前はかなりちかちかした。うっ、痛い…！

しかも倒れたと同時にかぶった水が服と耳を思い切り濡らした。
「冷たい…」

季節は春。いくら暖かくても水を被ったら寒い。
僕はズキズキ痛む頭を摩りながら、上半身だけ起こした。
そんな僕の耳に、ぱたぱたと焦ったような急いだ足音が届く。それは扉の前で止まった。

「大丈夫か！？　すごい音したけど…！」
「えっ？　あ…うん、…平気」

心配そうなメアの顔が、僕の前まで近づいた。近い！　近い！　さっきまで寒いなつてくらいに感じてたのに、いきなり顔だけ無駄に熱くなった。心なしか心臓までバクバクする。

な、なんだこれ。打ち所悪かったのかな。

おろおろする僕の前で、メアが「タオル持ってくる」と言っ立ち上がった。

ぼーっとそれを見つめてから、僕は熱くなった顔を両手で押さえる。

どうしちゃったんだろう、僕。…やっぱり、打ち所が悪かったのかな。どこがおかしくなっちゃったのかも…。

そんなことを思っていると、白いタオルを持って、メアが来た。

「ほら、タオル」

「あ、ありがと…」

なんだかどうしようもなく照れくさくなっちゃって、僕はメアの顔も見ずにタオルを受け取った。

やっぱり僕おかしい。

急いで頭と耳を拭いて、僕はタオルを突っ返した。

タオルを受け取ったメアが、しばらくそのまま沈黙する。

…？

不思議に思っ顔を上上げた瞬間、メアの手が僕の頭に触れた。

「!？」

びっくりして思わず身体を引く。それに気づいたメアは急いで手を離れた。

「あ…悪い。怪我してねえかと思って」

「う、ううん…別に。ちよつと頭打っただけだから」

僕の言葉に、メアが少し心配そうな顔になったから、僕は急いで立ち上がった。

「あ、でもたいしたことなくて、全然…っ」

痛くなんてないよ、と繋げようとした言葉は僕の口から出て行かず、ぐるぐると回る視界に眩暈と頭痛を感じながら、僕の意識はそこでブラックアウトした。

——たいしたこと、あつたみたいだ。

「ん…」

頭がズキズキする…、ああ、そうか、僕、倒れちゃったんだっけ。視界から察する限り、寝室らしい。メアが運んでくれたのか。ぼんやりとそう考えてると、なんだかものすごく恥ずかしくなってきた。…どうやって運んだのかな。

「……重いだろうし……引きずったとか……？」
ちよつとやだな、それ。

薄い掛け布団を鼻の上まで引きずって、一人で勝手にしょんぼりする。

うん？ あれ、なんでしょんぼりなんだ。今日、なんかおかしいぞ。一回医者に見てもらったほうがいいかもしれないんじゃないか。ここらへんに医者つていたっけ。

真剣に悩み始めた僕に、メアの足音が聞こえてきた。やばい。

具体的に何がどうやばいのかは分からなかったけど、僕はとりあえず寝たフリをした。

扉が静かに開く。

「起きたか？」

心なしか少しだけ緊張したように聞こえたメアの声に、僕も自然に身体を硬くする。

そのままメアの足音だけが響いて、近づいてくるのが分かった。

「まだ、寝てんのか」

そう言って、メアが僕の髪を指で梳く。ちよつ、何がしたいのっ！ 不必要に紅くなった顔に気づかれてないかがすごく不安になった。

……気づかれたらどうしよう？ 変なヤツだって思われる…かも。だいたい、どうしてこんな風になっちゃうんだろ？ この変なドキドキは…。

まさか…いや、そんなこと、でも…これは、ま、さか…僕、

「…ああみ」

え？

ぱち。

思わず目を開いた僕と、至近距離でメアの金目とばっちり視線がかち合った。

し、しししししまったああ——！！！！

メアの目が数回瞬きする。きょとん、としたその顔が不自然な笑みに変わった瞬間、僕の背筋が凍った。

「てめえ…起きてやがったな？」

「い、いえ！ めっそーもごさいませぬ！」

冷や汗だらだら。

笑顔のメアは必要以上に怖い。その上、メアは手の関節をぱきぱき鳴らし始めた。

ひええええっ…！

「なーにが『めっそーもごさいませぬ』だこの狼野郎っ！」

「あ痛あッ！」

デコピンされた！ 怪我人なのにッ！ 労わりは！？ 労わりはどこだよ！？

ちくしょう、涙出てきた！

「何すんのさ！」

「ああ？ 寝たフリなんぞするてめえが悪い！」

心配した俺が馬鹿みたいだぜ、なんて呟きながらそばの机に濡れたタオルと水の入った桶を置いて、メアが不貞腐れたように言う。

「え？ 心配してくれたの？」

「……………一応、な」

「そ、そっか…」

心配してくれたんだ、という嬉しさの反面、『一応』という言葉に少しだけ落ち込んだり。

な、何落ち込んでるんだ僕！ ていうかなんで喜んでるんだよっ！
ほんとおかしいよ！？ 今日の僕！

やっぱり、やっぱり僕……い、いやでも……でも……！

ぐるぐると一人でめまぐるしく考えていた僕は、椅子に座ってる
メアが笑ってることに気づくのの数秒かった。

「な、なんで笑ってるの！？ 僕何してないじゃん！」

「いや、だ、だってな……！ おま、お前……一人で百面相してんだからっ！ つ、馬鹿みてえ！」

「し、してないよ！ 百面相なんて！」

「いーやつ！ してた！ 紅くなったり青くなったり瞬き激しかったりしてたぜ！ はーっ、ウケるわーっ」

そ、そんなにあからさまだったの！？

僕はお腹を抱えてるメアを睨みながら内心わたわたしていた。

「してないーッ！ そんなことしないよ！ 僕はクールが売りだったんだからあ！」

「してたしてた！ あー……っ、マジでウケたーっ」

そういつて笑い終えて肩で息をするメアに、僕は不貞腐れてそっぽを向いた。

恥ずかしいやらむかつくやらでずっとそっぽを向いてたら、メアもちよつと反省したのか整えた呼吸でいつも通りの声を出した。

「悪いって。けどあんなに面白いお前も悪い」

「……僕悪くないもん」

「あー、はいはい。そーですね、ほら、いったん寝ろ。頭打ったんだろ？」

メアの手が僕の頭を撫でた。それが心地よくて僕は目を細める。

なんか僕、ここに来てから子供みたいだ。……なんかヤダな、いろいろ恥ずかしい。

「……おやすみ」

「おう」

でもまあ、今はいいや眠いし、と思って僕は目を閉じた。ついで

に、一言告げる。

「お腹空いたら起きるから、ご飯用意しておいてね」

「お腹空いたらって、ぶふっ、……っ、おう」

そこ！ 笑うな！ 誤魔化しても無駄だぞ！

ムカついた僕は、頭を撫でると見せかけて僕の耳を触ろうとした
メアの手を払って、耳まで布団を被って寝てやったのだった。

しかし起きたときにメアが上機嫌で僕の耳を触っていたのは別
の話。

n e x t .

第5話

——話し声が、した。

話し声？そんな馬鹿な。だって、この家には僕以外にメアしかないはずなのに。

朝。

ぼんやりとした薄暗さの中、目が覚めてからもベッドに横になっていた僕の耳に、メアと、誰か別の人の話し声が聞こえてきた。

今さっき来たのかな。少なくとも昨日、寝るまではいなかったし。

「まあ、メアだって知り合いくらいいるよね」

そう呟いた僕の頭にはふと、一昨日の女性のことがちらついた。

狼である僕よりも、メアに対して恐怖したように見えた、あの女性。あれは、まるで別の種を見るような目ではなかっただろうか。

でもまさか。メアは間違いなくウサギだろう。草食べてるし。きっと、同種でも性格の不一致とかがあるんだろう。

まだ納得は出来なかったけど、僕は自分にそう言い聞かせた。

話し声は、まだ止まない。なんとなく話していると分かる程度にしか聞いていないので、内容は分からなかった。プライバシーってもんもあるだろうし。

「……でもなあ、暇だしなあ」

退屈をそのまま呟いた僕は、悪いと思いつつも暇つぶしに隣の部屋に聞き耳を立てた。

聞こうと思えばこんなの簡単に聞けるんだから。聞こうと思わなければ、必要以上の音は入ってこないけど。

僕は未だ聞こえる声にベッドの上で体を起こし、そっと耳を傾けた。

「お前、あの狼いつまで預かる気だ？ こっちも狼なんぞがいると落ち着かないんだ」

知らない声だ。苛々した、男の声。若いとはいえないから、きつとそれなりの年なのだろう。

少し不穏な内容のそれに、僕は更に聞き耳を立てる。僕に関係あるっていうか、僕の話だし。

「いつまでって、長があいつをどうするか決めるまでだろ」

次に響いたのは聞きなれたメアの声。だけど、いつも以上に冷めていて別の人の声みたいだった。

少し、怖いと思う。身体がじんわり冷えていくような怖さだ。

「だが俺らに何かあつてからじゃ遅いんだ！ ……あの狼、早く殺したらどうなんだ？」

こ、殺すって！ ウサギが言う言葉じゃないでしょーに……。

僕は若干冷や汗をかきながらメアの返事を待った。

「殺してみるか？ 出来ないこたないが、仲間を殺されたなんて分かったら報復に来るだろうな。長もそれを考えて、こいつを生かしたまま向こうの頭と話つけようとしてんだろ」

ああ、まあ正論だな。

僕がウサギなんぞに殺されたとなったら、きっと家族全員押しかけてくる。僕は常にふらふらしてるから、行方不明ならなんの心配もされないが殺されたのなっちゃあ流石に黙ってないだろう。

……てか、殺したのがウサギだと分かればウサギ目当てでそれを理由に狩りに来るかも……うわ、ありえる。

——ん？　ちよつと待てよ、向こうの頭と話して……ウサギと狼で！？

な、なんて無茶な話合いなんだ……。

「話合いなんて、長が殺されるだけじゃないのか！　野蛮な狼相手に話を通じるわけがないじゃないか！」

向こうの彼も僕と同意見だったようだ。ほんと、無茶苦茶だよね！。……ただ、野蛮な、はないでしょ。一応ここに狼いますからね！。怒らせたいのかなあ？　牙と爪がなくても、痛めつけるくらいは出来るよ？

ちよつとイラついた僕はベッドから降りると、足音を立てないように扉に寄った。

こっちの方が聞きやすいし、次何か言われたらぶっ飛ばしに行きやすい。……寝起きだからキレやすくなってるな。

「……野蛮ねえ。まあ、俺も幸い殺されてないし？　長にそんな心配する方が野暮ってやつ」

「野暮って……！　長はな、お前と違ってただのウサギなんだぞ！」

うん？

「お前と違って」ってなんだ？

そつと身体を寄せた僕の脳内に、疑問符がぐるぐると回る。

「ああ、そうかよ。で？　だから何だってんだ？」

メアの声が更に冷たくなる。気にしてない風装ってるけど、かなり気にしてるよ……。

ていうかやっぱりメアってウサギじゃないのか？　お前と違ってただのウサギってことは、メアは「ただのウサギ」じゃないってことだから、……ううん？

僕は扉の前で1人小さくうんうん唸っていた。二人は話に夢中なのか気づく様子はない。

「長もなんでお前みたいな出来損ないを村に入れたんだか！　そもそもあの気狂いの女が、ひいつ！？」

何かを言いかけた男の声が、途中で小さな悲鳴に変わった。

悲鳴と同時に聞こえたのは、硬いものが木に刺さる音。部屋的位置と、音を考えると、メアが何かをテーブルに刺したらしい。

……多分、包丁。多分ね。でもあつてると思う。

「そういえば、あいつが小鳥じゃ餌が足んないって言ってたなあ……？」

「なっ、お、お前……っ、な、仲間を殺す気が……！？」

明確な殺意を持った声と焦って上ずった声が交じり合う。ウサギって結構殺伐としてるのか……もっとふわふわしてるイメージがあった……。

いやいや、メアが特殊なだけだと……信じたい。

「仲間？　いや、俺はただの『出来損ない』だしな、殺してもあんならの心情は今とあんま変わらない、だろ？」

声から察するに、あのいやーなにやり笑いを浮かべているんだろ
う……あーっ、怖い！

「ひ…ッ」

「さっさと失せろ。2度と口出しすんじゃないねえ」

その言葉に、どたどたと言う非常に慌てふためいた足音と乱暴に
扉を閉める音が響いた。

……逃げたのか。意気地なしめ。いや、僕も同じ状況になったら
逃げ出すかもしれないけど……。

自分で思っておいて少し情けなくなりながら扉に背中を預けた瞬
間、

背中を支えがなくなった。

「ひゃわ!？」

後ろに倒れる、と思った瞬間、僕の身体は柔らかくて暖かいもの
に支えられた。

……嫌な予感。非常に嫌な予感。

そう思っとなるべくゆっくり顔を上げると、そこには思ったとお
りの人物がにつこりと笑っていた。

「よー、盗み聞き將軍？」

「ど、どーも……」

再び『恐怖、笑顔のメア』降臨。…怖い。

あの会話を聞いた後だからなおさら怖い。

「起きてたなら言えよ、この野郎」

若干青ざめていた僕に気づいたメアは、小さく苦笑しながら僕の

身体を起こした。

ほ、ほんと情けない…。

「だって大事な話っぽかったから…」

「あー…」

部屋の空気が若干重くなる。どちらも喋ろうとしないから、なおさら重くなっていく。

なんとかしてこの状況を打破しなくては。

そう思った僕は、話をそらそうととりあえず何も考えずに口を開いた。

「お、お腹空いたなあ」

……。ちよつと待て、待ちなさい、僕。

どうして食べ物なんだ。

再度嫌な予感がして、僕は視線をゆつくりとメアに向けた。もう見る前から、震える身体のせいで気づいてるけど！

「やつ、やつぱり食いもんかよ！ 餓鬼くせえ…っ！ くっ、ぶふっ、！」

やつぱり笑ってる！！ もうヤダ！

僕は恥ずかしさで顔を紅くしながらメアの頭を叩いた。……高くてちよつと変なトコ叩いちやった。身長差どんまい。

「も、もういい！ 食べない！」

叫んで、僕はくりりと踵を返しかけ、——メアに阻止された。笑ったせいで涙目になりながら僕の肩を掴んだメアは、堪えきれないそれを混ぜつつ言葉を発する。

「悪いって。今から作るからよ、お前の好きなもんひとつ追加して

やるから、くっ、ふ！」

最後笑い入った。……許してやるもんか。

「いらない！ 僕は寝ます！ おやすみ！」

ぐい、と押し返して、僕は駆け足で再度ベッドと仲良しこよしした。

場の空気を変えられたのはいいけど、これはなんか違うだろ……！！

n e x t .

第6話

あの男が来た日から早五日。

メアの脅しが効いてるらしく、あれからは何も言ってこないし姿も見当たらな。この近くに寄らないようにしてるらしい。良かった良かった。

いや、別にメアの心配だとかいう意味での良かった、じゃなくて、なんていうか、そう、ああいう恐ろしいメアを見るのはこちらの心身の健康に良くないからだ。

別に心配してない。でも、ああいうのが近づいてこないのは、良いことだと思う。平和万歳だ。

平和、平和が大事。大事、なのだがかし。

「いやだあああ——ッ！！——ぜええったいヤダああ！！」

僕の平和はぶち壊されているのである……。

「うるせえ！ いいからおとなしくしてろ！」

「ヤダ！ 絶対いや！ 断固拒否っ！」

短い時間ながらも共にしている僕とメアはなんとなくお互いにこ

の生活にも慣れ始めていて、普段の会話もうまくいつていた。

が、このときばかりは僕も叫ばずにはいられない。

さて、どの時か、と言えば、答えはただひとつ。

僕の前にいる、爪切り（お手製のちよつと不恰好な奴）を持ったメアの姿を見ていただければたやすく予想できるだろう。ていうかしてください。

お昼ご飯を食べ終えてからすぐ、メアはその恐ろしい物体を取り出して僕に一言告げたわけである。

爪切るぞ、と。

勿論僕は断固拒否して、先ほどから10分程経った今も押し問答を繰り返している。

嫌なもんは嫌なのだ。それに、

「僕が他のウサギに襲われたりしたらどうしたらいいのさ！」

抵抗も出来ずに殺されるなんて嫌だ！

「うるせえ平気だ！ お前みたいな奴をわざわざ襲う親切な暇人なんてここにはいねえからな！」

「大丈夫じゃない！ 絶対襲われるもん！ いやーっ！」

「いないつつてんだろ！ だからさっさと切らせる！」

「嫌なもんは嫌！ 却下！」

僕はメアに叫び返しながらじりじりと後ろに下がって逃げる体制を整えた。

しかしメアもじりじり寄ってくる。このまま壁際に行ってしまうと非常にやばい状態になるだろう。

「もしもお前の爪が俺に刺さったらどうすんだ！ だから逃げるな

！ 耳を……ちげえ、爪を差し出せ！」

「おい！？」 今の言葉僕は聞き逃さなかったぞ！ 誰が差し出すか！ 僕の爪刺さってしまえ！」

本音が零れ出て動揺したらしいメアの一瞬の隙について僕はその体の横を擦り抜けた。狼舐めんなよ！

だが負けじとメアも僕を追いかける。……くそ、ウサギ舐めてた。

と、いうわけで、メアと僕の乱闘という名の鬼ごっこは1時間近く続いたのだった……。

そして、乱闘の結果はと言えば。

ぱちん。

「うう……」

ぱちん。ぱちん。

「いやーっ……僕の爪……!」

ぱちん、ぱちん、ぱちん……ぱちんっ。

「あー! 変な切り方しないでよ! 僕の爪が汚くなった……!」

ぱちん。ぱちん、ぱちん、ぱちん。

「……へたくそ」

「さっきからごちゃごちゃうるせえぞこのアホ狼」

椅子に座って爪を差し出す僕の素直な感想、もとい文句に、メアが綺麗に切りなおしながら低く唸った。

……だってへたくそなんだもん。

「アホじゃないし。僕、頭いいから」

「そーかそーか。でも頭いい狼は潜った机に頭ぶついたりしませーん」

…この野郎。人の失敗を。

ぱちん、とまた爪を切るメアに、僕は不機嫌に頬を膨らませた。

「メアだって扉にぶつかつたくせに」

「うるせー、それはそれ。これはこれだ」

「意味わかんない」

僕の指摘に、メアは不貞腐れて僕の額を小突いた。…痛い。

しかし僕の逃げ足もなまったようだ…ウサギに捕まるなんて。あれか、机に頭ぶつけたのが勝敗の分かれ目だったのか。

そんなことを考えて、僕はほんの少ししよげた。項垂れる僕を他所に、メアはひとり眉間に皺を寄せる。

「つたく、ほんつとすぐ伸びる爪だな……」

「……狼だもん。仕方ないじゃん、生物学的に仕方ないんですー」

「へーへー、そうですねー。……6、7日にいっぺん切らなきゃいけないな、こりゃ」

「えーっ、そんなに!？」

メアが呟いた言葉に、僕はこれから一週間に一回爪を切られる自分を想像してげっそりした。

そんな、飼い猫じゃあるまいし…いや、飼い猫だって爪を切るなんてことほとんどないだろう…ああ、もう嫌!

「うし、終わり」

ぱちん、と音を立てて、メアは僕の爪を切り終えた。

またもや短くなってしまった僕の爪……しかも若干不恰好……切ない……。

「んじゃ、ちよつと削るか」

「へ? 何を?」

ぽかん、として顔を上げた僕に、メアはきよんとする。その手には、やすり。

……… 嫌な予感！

「何って…歯？」

小首を傾げながら無邪気に言い切ったメアに、僕はまたもや逃げ出すはめとなったのだった。

勝敗？ …… ああ……、うん。

今日の晩御飯はとっても食べにくかったですよ、ええ。

ちくしょう！ 次は逃げ切ってやる！

n e x t .

第7話

「えつくし！」

晩御飯を食べ終えて、お皿を片付けてようとしたそのとき、突然メアがくしゃみをした。

風邪でも引いたのかな？ でもそんな季節でもないよね？ 花粉症？

単純に気になったので、僕は思ったことをそのまま問いかけた。

「メア、風邪？」

「あー……、そうかも。掛け布団足そうかな」

メアが鼻をすすりながら言う。掛け布団足すって僕のところは毛布だけでも結構暖かいのにな、……って、あ。

僕は思い浮かんだそれにとんでもなく申し訳なくなりながら、小さく聞いた。

「あのさ……、メアってそういえばどこで寝てるの？」

二回ほどベッドを占領してから、僕は当然のごとくメアのベッドを一人で使っていたのだが、正直メアがどこで寝てるのか気にしてなかった。失念していた、ともいう。

僕の言葉に、メアがお皿を重ねながらなんてことないようにさらに答えた。

「……」

あ、ここですか。

そーですか……って、ええええええええええええ——っ！？

ここ、という言葉の意味を正確に把握した僕は、勢いに任せて両手でテーブルを叩きながら立ち上がった。

打撃音が響いて、テーブルが少し震えた。うわあ……手が痛い。
って、違う違う！

「ここ！？」

「うおっ…な、なんだよ、いきなり…」

突然の僕の行動に若干引き気味にメアが僕を見る。が、そんなことはどうでもいい！

今の僕の中にある問題はただひとつだ！

ここって！ このリビングでかよ！ リビングで寝るなよ！

そりゃ外やキッチンよりはマシだろうし、部屋が寝室とリビングしかないんだったら当然の選択だけど！

こんなところで寝てたら風邪引くに決まってんでしょうがこの馬鹿ウサギは……！

大体家主なのに謙虚すぎる。ああ、苛々してきた。ので、僕はそのまま苛立ちを乗せて叫んだ。

「メア、今日はベッドで寝て！」

「は？ いや、別にいいって……だって俺が入ったらお前が……」

「寝なさい。いいね？」

「は、はい……」

僕が狭くなるだって！？ そんなこといいんだよ！

っていうかこの家は君の物のように！ 馬鹿！ ほんとにお人好しだな！ このウサギ！

などなど…言いたいことはそりゃあ山ほどあったのだが、僕はなんとか笑顔に留めた。

……はずなんだけど、どうしてメアは震えてるんだろう？ あ、あれ？ 僕何かしたかなあ…。

メアの返事を聞いてとりあえず満足した僕は、静かに椅子に腰を下ろした。

使い終えたフォークを持って、（僕はこの頃ようやくフォークを

使うことを覚えた。ちなみに、ナイフは使えない）自分の皿と一緒にまとめる。

無言でそれを行った僕に、メアがためらいがちに呟いた。

「でもお前、ほんとに良いのかよ」

「いいって言うてるでしょ。ていうか、ここはメアの家だ」

「……まあそうだけだよ」

なんなんだ、この男は。恐ろしいかと思えばこんな風にお人好し具合を発揮して。よく分からない。

気まずそうに視線を泳がすメアに、僕はぼんやりとそんなことを考えた。

「何がそんなに気に食わないのさ。それとも、床で寝るのが癖にでもなった？」

ちよつと嫌味っぽく笑ってみると、メアは少しムっとしてそれからにやりと笑った。

その顔やめてよ、怖いから。

「どっかの誰かのおかげでそーなっちまったみてえだな。てめえもやってみるか？」

「え、遠慮しとく……」

「ほー、人に勧めといて自分は遠慮つてどこか」

ほんつと……、こいつって優しいんだか怖いんだか分かんないよッ！

「ごめんつてば！ だから今日から一緒に寝ない？ っって言ってるんじゃない！」

言ってから、僕の顔は瞬く間に熱くなった。……今、僕、なんて言ったかな？

気のせいじゃないなら……『一緒に寝ない？』って言ったような……

！ ちよ、ちよちよちよーっ！ ひえー！？

い、いやでも、ほら、別に男同士だし！？ なんだって言うんだ僕……こんなことで照れてどうする！

「あ、お前も一緒なのな。まあ、ならいいけど」

「はいつ!？」

一緒にいいって……………え？

1人わたわたとする僕の目の前で、メアはきよとした表情を浮かべて首を傾げた。

「お前、マジで床で寝るとか言わねえよな？ 今度はお前まで風邪引きかけるぞ？」

「えっ…あ、そ、そうだね！そうだよね！あはは…っ」

どうやらただ単に僕の体調に配慮してのことらしい。一緒に寝たい、とかではなくて、ただ単に、それ。ああもう、僕は何を考えるんだか！

思い切り怪しまれたよね、今の。なんて、不安になりながらメアを見ると、普通にお皿を片付けていた。

よ、良かったあ…。

ほっと胸を撫で下ろした僕は、その後何事も無かったようにお皿を持っていったのだった。

湯船に浸かりながら、僕は一人悶々とこの頃のことを考えていた。なぜかと言えば、この頃の僕があまりにも異常だとそろそろ確信し始めたからであるのだが。

そして、メアが入ってくることなく一人で考えられる場所がここだけしかないからだのだが。

なんでメアのいないところで考えたいのか、なんで最近の僕は拳動不審でちよつと異常なのか。なんかの病気？ やっぱリウサギと狼が一緒にいるとなんか弊害でもあるとか？

そんな風に色々と考えている僕だったが、心の片隅には、その理

由が『アレ』であることも分かっている自分もいた。

いる……のだが、男としてそれはと———っても納得がいかない！

なぜなら僕はいたって健康な狼男児であるからして……断じて……その、……えーと、とにかく僕はノーマルなのだ！

前に仲間や家族と一緒にいた時は普通に女の子に反応してたわけだし、しかも手当たりしだいに手を出していたわけだし、うん、僕は女の子が好きだ。好き、なはずなんだけど。

「おかしい……、こんなはずないのに……」

ちゃんと女の子に欲情だってするよね……？ ま、まさかもうしないなんてことは……！？

そんなことを考えて、僕はひとり湯船で青ざめた。

だって、もしそうだったら……僕もう立ち直れないよ……！？

「や、やだなー……そんなの、うう……絶対やだ」

僕はお湯の中で頭を振った。ばしゃ、とお湯が跳ねる。うが、耳にかかった。ちょっとやな気分。

「……だいたい……メアは僕のことなんとも思っていないだろうし」

まだここに来て一週間とちょっとぐらいしか経っていないのに……。おかしいよ。

てか、メアもメアだ。僕は狼なのにあんな風に優しくしたりするから……！

でも……冷たくされてもやだなあ……。

「つて！ 僕はどこの乙女だ！」

か、顔が熱い！ 恥ずかしい。

「うう……メアが悪いんだ……」

僕は尻尾でゆらゆらとお湯をかき回しながら小さく呟いた。

恥ずかしくて死にそう……顔も熱い……し……あと、目が回ってる？

「へ……？」

気づいたときには、ブラックアウト。

……前にもこんなことあったなあ。

「……馬鹿だろ、お前」

のぼせて倒れた僕に、メアが一言。額に乗せた濡れタオルがひんやり気持ちいい。

「ホントに頭ついてんのか？首まで浸かってあんな時間入ってたら逆上せるに決まってるんだろ……」

メアが呆れたように言った。

何もそんな風に言わなくてもいいじゃないか。まあ僕が悪いんだけどさ、確実に。

悪いと思ったから、僕は素直に謝罪を口にした。

「重かったでしょ？ごめんね、迷惑かけて……」

「別に迷惑じゃねえ。のぼせるまで入ってたら体に悪いからやめろって話だよ」

僕の謝罪を聞いたメアはため息混じりに呟いて、乗せたタオルを一度直してからそつと手を離れた。

あれ、それってつまり、怒ってるんじゃないくて、心配してくれたってことだよな？

なんだかちよつと嬉しくなってしまった僕を他所に、メアはくりと踵を返してしまう。

気づいたときには、口からぼろりと言葉が零れていた。

「行っちゃうの？」

痛む頭と、揺れる視界で少し不安になっていたのかもしれない。

風邪引くともそういうこともある。別に、メアと一緒にいたかったとかそういうわけじゃなくて、ごによごによ…。

「風呂入りに行くだけだって。すぐ戻る」

子供のような僕の言葉が意外だったのか、振り返ったメアは少し優しい目をして笑った。

「う、分かってるよ、そんなら、い…っ」

言い返したかったのに、ちょうどタイミングで頭がくらくらしてきた。気持ち悪さに、少し呻く。

メアはそんな僕の様子を見てすぐに、心配そうに少し首を傾げる。

「平気か？ やっぱりいた方がいいか？」

「……平気。だから……お風呂入って…き、なよ」

「でも、」

「……気、遣わないでいいよ。メアだってお風呂入ってこなきゃだめでしょ」

そんなに心配しなくても、逆上ただけじゃ死なないよ。気持ち悪くはなるけど。

でもそんな風に心配してくれるメアが本当に嬉しくて、僕は小さく笑いながら、メアが出て行きやすいように冗談を口にする。

「逆上せないように気をつけてね」

一瞬、メアが驚いたように瞬きして、その後、ふわりと笑った。

「どっかの馬鹿狼さんと違って俺はそんなことしねえから、安心しな」

「うるさい、ばーか」

「馬鹿じゃねえよばーか」

ここ一週間で慣れてしまった軽口を叩いてから、メアはゆっくりと部屋を後にした。

途端、しんとした部屋の中で、僕はがんと痛む頭にきゅつと眉を寄せる。

起きてたら痛いだけだし、寝てしまおう。

メアが入れるように、とベッドの端によって、僕は目を閉じた。

n
e
x
t
.

第8話

——気持ち悪い。

頭蓋骨の内側から叩かれているような頭痛を感じて、僕はその場に蹲った。

真っ白なのか、それとも真っ黒なのか、よく分からない床に手について、へたり込む。

気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。

喉を掻き毟りたくなるような、胸を抉りたくなるような、いつそ腹を掻つ捌いて欲しいような、そんな、気持ち悪さが僕を襲った。

目の前がくらくらしてきて、尖った爪の生えた手で、顔を押さえる。

——尖った？

どうして尖ってる？ 僕の爪はメアが切って、丸くなっているはずなのに、どうして——、

嫌悪感にも似た違和感が鳥肌を呼び起こした瞬間、僕は目の前に転がっているものに気づいてしまった。

黒い髪と、金色の瞳。よく見知った顔が、その耳の白い毛が真っ

赤に染めて、横たわっていた。

その喉元は原型が分からないほど噛み砕かれていて、僕は戦慄する。

誰が？ 誰が、やったんだ？

もしかして——、そう思った途端、僕は顔を押さえていた手にぬるついた感触を覚えて、勢い良くその手を離した。

「あ、……あぁっ、……！」

真っ赤だ。僕の手は、真っ赤に染まっていた。メアの首から噴き出したそれと、同じ、赤。

僕だ、僕がメアを、——殺した。

「——うアアあっ！？」

勢いよく起き上がった僕の身体から、毛布が落ちた。視界に映るのは暗い室内。ここ一週間で慣れてしまった、メアの部屋。

酷く煩い鼓動に胸を押さえつけて、僕は荒く呼吸する。

どうしようもなく怖くなって、少し狭いベッドの隣を確認すると、

——良かった、いる。

「夢か……」

メアを殺す夢なんて、とんだ悪夢だ。

……いや、でも、もしかしたら僕は、少し前の僕だったら、ああしていたかもしれないのだ。

夢ではなく現実で、メアを殺していたかもしれない。

それは僕がウサギを餌としてしか見てなかったからで、メアがこんな風に僕の心に入ってくるだなんて知らなかったからだ。

今は、違う。今の僕は、メアを殺すこと……殺してしまうことにちゃんとした恐怖を覚えた。夢が、証拠だ。きっと以前の僕ならなんの感情も沸かなかっただろう。

「大丈夫、だよ……？」

返事は来ないと分かっているのに、いや、分かっているからこそ僕はそつと隣で寝息をたてるメアに問いかけた。

狼がウサギを食べるのは当然のこと。殺すのは、当然のこと。でも、僕は、メアを殺したくない。……殺したくない。

ぎゅう、と押さえた僕の胸からは、あの気持ち悪さが消えない。圧迫されたような感覚がしつこく残る。

ただの夢。夢、だけれど、ただそれだけで捨て去れるようなものではなかった。

「……………メア」

もし、本当に食べちゃったら？

空腹に耐えかねて、メアを食べちゃったら？

そんな眩きが、頭のどこから響いてきて、僕は身体を強張らせた。じんわりと、熱いものがこみ上げてくる。

「やだ……嫌だよ……」

嫌だ。そう思うけど、本能ってやつにどこまで逆らえるかは分からない。分からないからこそ、怖い。

怖いと思うなら離れればいいんだろうけど、そうするにはもう、遅かった。この空間が、場所が、心地よく、なりすぎていた。

殺したくない。でも本能に逆らえるか分からない。なのに、離れ

ることもできない。

歪み始めた視界は決してのぼせた頭痛のせいではなくて、僕の頬には次々と雫が落ちていった。

「う…、…ひっ、く…」

僕は狼だ。何がどうなってもそれは変わらない。

いつかはウサギを食べちゃうかも知れない。メアを食べちゃうかもしれない。

そう思うだけで、僕の目から涙が零れる。

「っ…っ…」

唇を噛んで、抱えた膝の上に顔を埋めて、なるたけ声を抑えて、泣いた。

——暗闇の中、金の瞳が僕を見つめているのも知らずに。

次の日、僕は腫れてるだろう目を見せたくなくて、毛布に潜ったままメアが起きるのを待った。

しばらくしてから眠そうに起きたメアに「まだだるいか？」と聞かれたから、肯定して先にリビングに行ってもらった。

「問題はこの後だね」

どうやって誤魔化そう。そう思って周りを見回した僕の視界に、昨日メアが僕の頭を冷やすために使った濡れタオルが目に入った。メアが、持っていくのを忘れたらしい。

まだ冷たいかな？

手に取ると、冷やすのに丁度いい温度のそれはその水気で僕の手

を少し湿らせた。

「ん、よし」

それを目蓋の上に乗せて、僕は再度毛布を被る。

メアが朝食を用意するころにはきつと腫れも収まってる……てか、収まれ。

祈るように念じて、僕は強く濡れタオルを押し付けた。

n e x t .

第9話

朝食を作り終えたメアが部屋に入ってきた時には、もう僕の目は腫れてなかった。みたいだ。

みたい、というのは、僕には確かめようがないので、僕の顔を見たメアが何も言わなかったからそう判断した。

特にいつもと変わった様子は無かったから、きっと収まっていたんだろう。

そんなこんなで、僕はいつもどおりメアと朝食を取って、今は以前来た川の近くの森で散歩中。

というか、僕がメアについてきたただけけど。

そう、そのはずなのだが。

「……………」
「……………」

森に入り込んでから約十分。体感時間がそれだから、もっと時間が経っていることもありうるけど、問題はそこじゃない。

二人して無言なのだ。ずっと。家を出てから、森に入って歩いている間、ずっと無言。

……正直言っつらいものがある。なんか喋ろう、と思ったりするのだが、空気の重さに押されてその勇氣は何度も押しつぶされていた。

さくさくと、草の上を歩く音だけが響く。

なんでこんなにも無言なんだ……気まずい。

ふざけているときはいくらでも口から出てくるくせに、こういう

ときだけ言葉は喉の奥に沈んでしまっている。

「……………」

「……………」

さくさく。無言。

「……………」

「……………」

無言。ひたすらに無言。

「……………」

「……………」

き……………つ、気まずっ！

前を歩くメアは何も言わない。なんか言えよ！と、念波を送ってみるが、勿論、返答はなし。

そろそろ真面目に何か言わないと、と思って僕が口を開こうとした瞬間、メアが振り返った。

思わず身構える。なんでだ。構える必要は無いよね？ そうだろ、僕。

そんな感じで少し不自然な格好で立ち止まった僕だったが、メアは特に突っ込みも入れずに少し気まずそうに呟いた。

「あ……………俺さ、用事あるからちよつとここで待っててくんね？」

「え？……………あ、う、うん」

一応頷いて見せたのだが、急いでいたのかメアはそそくさと、僕の返事をほとんど待たずに奥のほうへ行ってしまった。

いいのだろうか、僕を放置したりして。

「信用されてる、って、思っているのかな」

そんな風に考えて、僕はちよつとにやけた。先ほどの気まずさもあつたから、本当にちよつとだけ。

それにしても、なんの用事だろう？ 森の奥なんか用事、ってかなり珍しいと思うんだけど。

近場の木に寄りかかってぼんやり思っていたそのとき、不意に後ろの方で小さく音がした。

「？」

気になって振り返ってみる。

と、そこには、少し前に会った、子ウサギが一人で立っていた。まだ少年といった容姿のその子ウサギには、見覚えがある。

確か、ユキって言ったかな。本名は雪之助とかかもしれないけど。僕の腰くらの背丈の子ウサギは、まったく怯えの色を見せずに、僕を見上げていた。

狼相手だっというのに随分と無防備だな。初めて出会ったときもそうだったし、ちょっと危機回避能力が足りてないのかな？ そんなんじゃすぐに食べられちゃうよ？

「ねえ、おにーちゃん」

「うん？」

呼ばれたので返事をする、ふわふわと耳が揺れるのがばっちり視界に入ってきた。た、食べたい。

心の奥から徐々に湧き出てくる食欲を僕はなんとか押し込めた。僕は本能に打ち勝たねばならないのです。

それから、僕を信用して（というのは想像だけど）ここに置いていったメアに少し…申し訳ない、とか思ったから。

「おにーちゃん、狼なんですよ？」

にこ、と笑ったユキちゃんは本当に『狼』という単語の意味を理解してるのかいまいち掴めない。

「うん」

「じゃあさー、……きつね、って食べるの？」

「狐？」

僕は唐突な質問に首を傾げた。なんで狐？

そんな僕の目の前で、ユキちゃんの耳がたれる。……ぐあ、食べたい。

「あのね、きつねがね、このごろ僕らのところまで入ってくるんだって」

「え？」

我慢我慢ーっ、と言い聞かせていた僕は、ユキちゃんの言葉に一瞬呆けた。

狐といえば、自身の力のためか単体の小動物を襲うのが主で、こんな大勢群れだったウサギのどこまでは来ない……はずだけど。

「その狐って、どんな？」

「ちよつと引つかかったから、聞きなおす。」

「どんなって？」

「色とかかな、知ってる？」

「え？ えーとね、普通の茶色の耳してる」

「顔は？」

「んーと、……黒い眼鏡みたいなのかけてた」

「っ、……グラサン——！」

グラサンなんて珍妙なものかけた狐なんて、心当たりない……っ
て言いたかったとこだけど。

残念なことに僕の脳内にはばつちりしつかりとある狐の顔が思い
浮かんでいた。

よりにもよって、あいつがこんなとこまで来るなんて……でも、
ありえることだ。

あいつは他の狐とは違う。実力も、性格の悪さもずば抜けている。
それこそ、前の僕と張り合えるぐらいには。

僕は無意識に爪を噛んでいた。そんな僕を、ユキちゃんが不思議
そうに見上げる。

「そのきつねね、一人になったウサギを襲うんだって、しかも、誰
も来ないところに連れ込むんだって」

「ああ、手口は変わってないのか……。って、それじゃ、こんなと
こにいたら駄目じゃないか！ お母さんが心配するよ？」

ますます鮮明になっていく記憶の中の忌々しい狐をかき消そうと
していた僕は、ユキちゃんの言葉に噛んでいた爪を離した。

僕の言葉に、ユキちゃんは一瞬泣きそうな顔をして、それから俯
く。

「……おかーさん、もういないからいいの」

「え…?」

想像もしなかったその言葉に、僕の動きが止まった。

落ち葉の上に雫が落ちる。俯いたユキちゃんの頬から、幾度も落ちる。

「…食べられちゃった、の」

「……、…そ、つか…」

なぜだか、僕も狐と同じことをしていたのだと、いや、今もまだしているのかと思うと、胸が締め上げられるような思いになった。

僕らはウサギや、他の動物を食べなければ生きていけない。……

それは、仕方ないことだ。

「おにーちゃん、狼だから強いよね?」

顔を上げたユキちゃんの頬は、涙で濡れていた。

「…うん」

「じゃあ、…じゃあ、きつねのこと…」

「…うん」

そうか、この子は僕にお母さんの敵を取って欲しかったのか。

僕は無意識にユキちゃんの頭を撫でていた。ぎゅ、とユキちゃんが僕に抱きつく。

「そしたら、…ぼ、僕のこと、…食べていいから、…きつね、やつつけてくれる…?」

その体は震えていて、怖がっているのは嫌でも分かった。食べられる、ということの意味は分かっていたらしい。

「いいよ。……でも、君のことは食べない」

「え?」

ユキちゃんは目を見開いて僕を見つめる。僕はそんなユキちゃんを見下ろして、やわらかく微笑んだ。

獲物に向けて、ではなくて、本当に、優しい気持ちで。

「君を食べてしまったら、……もっと、大切な人も食べていいって
思ってしまうかもしれないから、…食べないよ」

「…いいの？」

「うん」

僕がもう一度微笑んでみせると、ユキちゃんも微笑んだ。

その時の僕の頭にあったのは、グラサンをかけた嫌味な笑みを浮かべる狐。

忌々しい、下衆の極みのような奴。

——美園。
みその

第10話

傍に腰を下ろして生えている草を食べているユキちゃんの隣に座りながら、僕はあの忌々しい狐のことを考えていた。

最後に会ったのは一体いつごろだったか。随分と前のような気がしたが、会った回数自体は決して少ないものではなかった。

だから、僕はあの腐れ狐についてそれなりに知っている。別に知りたくもないことだが、しょうがない、同じ穴の貉であるわけだし、敵を知ることには悪いことじゃないから。

その腐れ狐こと美園は、自他共に認める徹底的な快樂主義者で、僕は昔からあいつのそこが気に入らなかった。

食うか食われるかというのがほぼ日常になっている僕らの中で、餌を『玩具』だと言い切ったのはあいつぐらいだ。本気が冗談かは置いておくが、少なくとも有言実行はしていた。

女は必ず本人がいうところの『味見』をしてから殺して、気に入った奴なら男女関係なく抱こうとする。しかも、大切な存在がいるならばその前で犯すのだ、まるで無力さを突きつけるように。

僕だって、女の子と遊ぶのは好きだ。でもそれは決して食料（…そう、食料）には向けられない感情だ。

食べるのが一番だから。そういうものだから、僕は同種族またはそれに順ずる種族としか関係を結ばなかった。

僕ら、肉食獣にとってそれが正しい行動だ。食料はそれ以外の何の意味も持たない。それがせめてもの情だというのに、あいつは彼らを『玩具』だと言い切ったのだ。

『だって楽しいだろ？ 弱いのに頑張っちゃってさあ』

そういつてけけらと下衆な笑みを浮かべていたのを僕は知って

る。

はつきり言って、僕はあいつが大嫌いだ。すかしたグラサンも、かっこつけた態度も、余裕の表情も。

僕だって昔は人のこと言えた義理じゃなかったけど。今だって、そんなこと言う資格はないだろうけど。

ただ、あいつは自分以外は皆クズだと思ってる。自分さえよければいい、と思っている。それだけはどうしても許せない。

一度、あいつに家族を馬鹿にされたことがあった。その時は久々にぶち切れて、殺意丸出しで殺しにかかったのを覚えている。

が、結局痛みわけのような状態で美園が逃げ出した。僕とあいつは、大体同じくらいの力だったのだからしょうがない。むしろ、あいつの方が強いかもしれない。狐のくせに、少し異常な力だから。

実際あいつは僕から逃げおおせたし、僕はあいつを追いかけられなかったのだから、条件さえそろえばあいつは僕を殺せるだろう。

……そして今、その「殺せる条件」が揃ってしまっている。

「美園が、来るのか」

今の僕じゃ傷ひとつ付けられないに違いない。こんな、牙も爪も役に立たない状態で勝てるわけがない。与えられるのは、よくて打撲、程度じゃないだろうか。

絶望的な状況にため息を吐くと、隣のユキちゃんが草を食べるのをやめて僕を見上げた。

「どうしたの？」

「え？ いや…なんでもないよ」

心配をかけないように微笑んで見せると、ユキちゃんは安心したように頬を緩める。

前の僕なら、間違いなく食べてただろうな。喉元ぐさり、だね。間違いない。

僕は、随分と変わった。外見だけじゃなくて、中身も。

そしてそれは悪いものじゃなくて、むしろ結構居心地がよくて、それからとっても素敵なことなんだと思う。幸せって、こういうこ

とだ。

「ねえ、ユキちゃん」

「なあに？」

「これからどうするの？」

「何を？」

問いかけると、ユキちゃんはきよとした顔で僕を見上げた。少し言うのに気が引けながらも、言わなければならないことだから、ゆっくり言葉にする。

「お母さんがいなくなったのにこんなところにいるってことは、ユキちゃんは今、誰かにお世話になってるってわけじゃないんでしょ？」

「う……、……うん」

「ひとりで過ごしてるんだよね、危ないのに」

「……うん」

改めて自分の状況を認識してしまって心細いのか、ユキちゃんはくしゃりと顔を歪めた。

やっぱり。察していたけど、母ひとり子ひとりのユキちゃんには、お母さん以外に世話をしてくれるような人はいないらしい。この状況でお父さんが傍にいないってことは、心情的に傍にいられなくなっただけ、物理的に傍にいられなくなっただけのどちらかしかないから。そっか。……じゃあさ、ユキちゃん」

「うん？」

ひとつ提案をしよう、とユキちゃんへ呼びかけた、その時。

「悪い、遅れ——た？」

がさ、と草むらをかき分けてきたメアは、謝罪の言葉を口にする途中でユキちゃんと一緒にいる僕に気づいて、目を見開いて固まった。

そのまま数秒、僕とユキちゃんを交互に見つめる。

そりゃ、一人前の狼が、前に食べようとした子ウサギと仲良く一緒にいたら誰だって不思議に思うだろう。仕方ないので、僕は何も言わずにただメアを観察するに留めてあげた。きっと今は混乱しているに違いないから。

さて、そんなメアの手には何やら、随分と重そうな大きな袋がひとつ。

どうやらあれを貰うために森の奥まで行っていたらしい。

「なんでお前らが一緒に……？」

結局結論が出なかったのか、顔に書いてある疑問をそのまま口にしたメアに、僕は小さく苦笑した。

でも、今この状況で一から説明するのは少し面倒くさいので、立ち上がりつつ言う。

「後で話すよ。それより、ちょっと相談があるんだ。聞いてくれる？」

「……別に、いいけどよ」

少し歯切れの悪い声で答えるメアにちょっと不安になるが、その視線がユキちゃんに行っているところを見るに、どうやら小さな子が苦手なだけらしい。

ふむ、そうなるとこれからの相談が少ししづらいな。……まあ、いいか。

別に僕は嫌じゃないし、と結論付けて、先ほどユキちゃんに言いかけたそれを、メアに伝えた。

「ユキちゃんを、メアの家で預かりたいんだけど」

「は？」

いきなり何を言い出すんだ、という顔をしたメアの耳を引っ張って（痛いとかくのが聞こえたが気にしないことにする）、ユキちゃんには聞こえないように囁く。

「ユキちゃん、お母さんが亡くなったらしいんだ。その原因に、心当たりがあつて」

「……別にうちで預かる必要はねえだろ」

「誰も面倒見てくれる人がいないんだよ。ずっとじゃなくてもいいから、一時的にでもいいからさ、面倒見てあげてよ」

このままじゃユキちゃんまで殺されかねない。ユキちゃんどころか、他のウサギだって。

あいつが狩りを始めたってことは、そういうことだ。これから、被害は絶対に広がっていく。

そんなことを考えて美園の顔を思い出してしまい眉を寄せた僕に何を思ったのかは知らないが、メアが沈黙する。

「……………」

なにやら神妙な顔つきなので、一応は悩んでくれているらしい。でも、一応じゃだめなのだ。少しの間でもいいから預かってもらわないと。

「今更、ウサギが増えても問題ないでしょ？　ってことでユキちゃんを預かります、決定！」

「なんで居候のお前が決めてんだよ」

「あだっ！」

少々強引にことを進めようとしたら、見事にひっぱたかれた。

すごく大事な問題なのに、と思いながら叩かれた場所を押さえて睨むと、しばらくの間の後に、メアが小さくため息を吐いた。

「……まあ、お前と違って役には立ちそうだ」

「ちよっと、それどういう意味さ」

「そのままの意味だよ。お前ひとりより、それとセットの方が役に立ちそうだってな」

……どうやらユキちゃんを預かってはくれるみたいだけど、その言い方は失礼だぞ。

確かに僕は何にも出来ないけどさ。家事とか、家事とか、家事とか。

むす、と膨れた僕を見てお得意のにやにや笑いを浮かべながら、メアが手に持っていた袋を、運びやすいよう担ぎなおした。

そうして、くると背を向けるメアに、今までこちらを窺ってい

たユキちゃんが眉を下げた。

「行っちゃうの？」

か細い声が、問いかけてくる。僕ですらちくりと胸が痛むような声だったのに、メアは首だけで振り返って一言、

「ああ」

……そりゃ冷たすぎるぞお前。

むすくれた顔で唇を噛む僕に、言いたいことが伝わったのか、メアが肩を竦めた。

ユキちゃんは相変わらず不安げな顔で、その場に座ったまま僕らを見上げている。

本当に預かってくれるんだよね、なんて訝しむ一歩手前で、メアが僕に向かって少し居心地悪そうに言った。

「それ連れてけよ。俺はこれだけで手一杯だからな」

「え、あ……………うん」

言いたいことはしつかり分かったので頷いて、僕はユキちゃんに手を差し出す。

差し出されたユキちゃんは一瞬きょとん、と首を傾げたあと、意図に気づいて満面の笑みを浮かべた。

「帰ろう」

「う、うんっ」

急いで立ち上がったユキちゃんはぎゅ、と僕の手を握り締めてきて、僕はほんの少し、爪が丸くなっていて良かったな、とか考えながらふたりで並んでメアの少し後ろを歩いた。

なんだか、親子みたいだね。メアはさしずめ子供への態度が分からないお父さんってところか。

そんな風に、ひとりほんわかとした気持ちになりながら僕は帰路についたのだった。

n
e
x
t
.

第11話（前書き）

蹴ったり殴ったりあります。

第11話

ユキちゃんを預かってから、早いものでもう6日経つ。

少し悔しいのだがメアの予想通りユキちゃんは働き者で（ぶっちゃけ僕より早起きだし、掃除も上手いのだ）、しかもその明るさでメアともそれなりになじんでいた。

ずっと預かるつもりはない、と言っていたメアも懐いてくるユキちゃんに満更でもなさそうで、このまま居候がもうひとり増えるんじゃないかなーと僕は思っている。

僕は大歓迎だ。いや、別に餌としてではなく、ユキちゃんがいると、メアをあんまり意識しなくて済むし、二人つきりでちよつと恥ずかしくなることもないし、寝るときも間にユキちゃんが入るから狭いけどどきどきしなくて済むからである。……全部メアがらみで、ねえ。

まあとにかく、僕はユキちゃんが一緒に住むことに拒否は一切ない。食料だって足りてるから、ユキちゃんを食べることはなさそうだし。

その分、他の動物を食べてるってことだけど、最近はそれで感じるストレスを、彼らに感謝することでなんとか軽減している。

こういうと、逃げてるように聞こえるけど実際そうだからなんとも言えない。

僕は、僕のお腹に入ってくれる彼らにお礼を言うことで、いろいろなものを乗り越えようとしていた。

たとえば本来食べる相手であるはずのメアを好きになってしまったことだとか、今まで食べてきてしまった彼らに対しての罪悪感だとか、こんなことを感じるようになってしまったの家族への申し訳なさだとか、を。

悪いことじゃない、なんて言えないけど、これが僕にできる精一杯だった。

なんて、かつこつけてみるが、最近はそういう面でのストレスは感じなくていいようになってしまった。

非常に、屈辱的な方法で解決したのである。

「ほらよ」

メアの手が、僕の前に「それ」を置く。ああ、嫌だ、見るのも嫌だ。

「……いやーたべたくなーいー」

茶色の丸っこいのが一杯入った、底の深い皿を押し戻すと、メアがひくりと米神をひくつかせた。

無理矢理に口角を上げて、目が笑っていない笑顔を浮かべる。隣のユキちゃんが小さくはねるのが分かった。だめでしょう、いたいけな子供をいじめちゃ。

「ユキちゃんが怖がつてるからその笑顔やめなよ」

「ほー、じゃあてめえはこいつの横でばりばり小鳥食ってビビらせんのか？」

「……それは、……できないけど」

「じゃあたつたと食べ。わざわざ他所から届けてくれたんだから感謝して食べよ感謝して」

「うっー……」

獲物には感謝することにしたけど、こんなものには感謝したくない！

僕は心中で叫びながら、皿に入れられた「ドッグフード」なるものを涙目で睨み付けた。

おいしくない、おいしくないぞこれは。

ニンゲンさん風に言うならば、味のついたサプリメントみたいな

もんだ。これが安物のドッグフードだからそうなのであって、高級なのだったら、ちゃんと肉の味がします。そんな気がします。……なんで敬語なんだ僕。混乱してるな？

ううー、と再度うなった僕が哀れに見えたのか、ユキちゃんがその黒い瞳で僕を見上げながら握りこぶしを作った。

ぎゅうと握ったそれは、ふたつ。きゅつと寄った眉には真っ直ぐな応援が込められていた。

「がんばって、おにーちゃん」

「……がんばります」

これを食べなきゃお腹が空いてしまうわけだから、本当は意地でも食べなければと思っている。

それでもこうやって駄々をこねるのは毎回ユキちゃんが応援してくれるからで、つまりはそれがうれしい訳で、僕はご飯の時間になると駄々をこねる。

そんな風にちよつとひねくれて幸せをかみ締めているのが分かっているのか、メアも毎回怒るものの怒った後の目は穏やかだ。

幸せだなあ、と思う。ユキちゃんとメアと、三人でいると、眼前に迫っている問題も和らいでいくのだ。美園が、この村に近づいているという不安が、二人といる幸せによって。

ただ、僕は気づくべきだった。

その幸せをぶち壊すのは、美園であるということに。

それは、昼時に起こった。

遊びに行きたいと言ったユキちゃんに、メアに掃除を頼まれていた僕は後から行くと言っていた。

遠くに行かないように、と言いついて。遠くに行かなければ、安心だとも言いつもりだったのだろうか。

掃除を終えようとした僕の耳に飛び込んできたそれに、僕は総毛立った。

ユキちゃんの、叫び声。

凄まじい音を立てて倒れる椅子も気にせずに部屋の中を駆け抜けて、僕は小屋の外へ駆け出した。

メアは洗濯しに小川まで行ってるはずだから帰ってくるまでは三十分はかかってしまう。聞こえているかも怪しいが、聞こえていることを祈って僕はひとり森へと飛び込む。

くそ、油断してた。

この頃は平和すぎたから気が抜けていたのだろう。ユキちゃんをひとりにしておくことがどれほど危険なことか分かっていなかった。声が聞こえた方へ走りながら、無意識に舌打ちする。

爪も丸いし牙だって削られてる。何も出来やしない。でも、何にも出来ないだろうけど、何もしないよかマシだ。

「……………っ！」

距離からすれば遠くはなかった。けれど近いと言える距離でもない。

がさがさと派手に音が立っているのも気にせずには僕はひたすらに森を駆けた。途中、ぶつかった枝が派手な音を立てて折れるのが見えた。

小動物が、僕の放つ狼の匂いに怯えてか我先にと逃げていく。

こんなに焦ったのなんて何時ぶりだろう。僕より大きな狼に追われた時以来、かな？

自嘲の笑みを浮かべながら、僕はユキちゃんの匂いが段々と濃くなっていくのを感じた。

そしてようやく、木々の間に白い影を見つける。

ほっとしたのもつかの間、ユキちゃんに爪を振り上げる「あいつ」を見つけて、僕は背筋が凍るような思いで、二人の間に飛び込んだ。

「——ユキちゃんッ！」

振り下ろされるぎりぎり、ユキちゃんを抱え込むようにしてぶつかって、小さな体ごと転がって相手と距離を取る。

爪が掠ったのか背中になん少痛みが走ったが、傷は軽そうだ。とりあえず、小さく息を吐く。

腕の中に抱きこんだユキちゃんを見ると、震えてはいるが無傷でちよっと安心した。

ユキちゃんが、そんな僕を見上げながらぼろぼろと涙をこぼす。

「お、おにーちゃ、ごめ……っ、ぼく、っ」

「大丈夫だよ、心配しないで」

安心させるように微笑んでみせると、ユキちゃんも弱弱しいが笑顔を返してきた。その頭を撫でてあげてから、僕はユキちゃんを背

に庇うようにして立ち上がる。

一瞬だけ見えた人影を改めて確かめるように見ると、下衆な笑みと悪趣味なサングラスが僕の視界に入った。

相手は、僕を見とめた途端に、その笑みをより一層深くして笑った。

「久しぶりだなあ？ 慧羅^{けいら}」

「……黙れ。今の名前はそれじゃない」

厭味つたらしい笑みが気に食わなくて気持ち悪くて、どうしようもない不快感が僕を襲う。

慧羅は、こいつ——美園——に名乗った偽名だった。もう必要ないし、聞きたくもない名前だ。

不快感を露にした僕が面白かったのか、美園はわざとらしいリアクションで人差し指を米神に当ててみせた。

「あー、そうだったなー。……なんだっけ？」

「教える義理はないね」

吐き捨てるように言う。自分でも驚くほど冷たい声が出た。

ああ、まだこんな声が、感情が、あったのか。殺してやりたい、なんて感情が。最近が穏やか過ぎて、忘れてしまっていた。

爪と牙さえ元通りなら僕はすぐさまこいつの喉元を狙いに行っただろう。しかし残念なことに、今の僕にはそれがない。

くそ、と心の中で悪態をついた僕に、美園がわざとらしく肩をすくめた。

「あーあ、つめたいねー」

そう言って喉の奥で笑っていた美園だったが、ふと気づいたかのように笑みをやめる。

来る、と思つて身構えようとした次の瞬間、僕の呼吸は一瞬止まった。

「あつ、が」

腹部に走る激痛と衝撃で、蹴られたのだと分かる。視界に映るもので体ごと吹き飛ばされたのも分かった。

なのに地面にすれる音がしたのを聞いた時に僕がまず思ったのはただひとつだった。

おかしい。

美園の蹴りに目が追いつかなかったなんて、おかしいと。追いつけなかったなんて、おかしい、とそれだけが。

その場に座り込んで咳き込んだ僕に、美園が酷く耳に障る声で笑った。

「冷たいからつい蹴っちまったよ。ごめんねー、『蒼巴ちゃん』」
人を馬鹿にしたような笑いを混せて言われた言葉に苛立って、僕は美園を睨みつける。

「…下衆野郎」

「やっぱり冷てえなあ、さすがは狼ってとこかねー？」
へらへら笑いながらサングラスを押し上げた美園は、上機嫌に尻尾を揺らして唇を舌で舐めた。

ぞくりとした何かが背中を駆け上がる。

「でもま、今のを防げないようなのに負ける気はねえから？ ゆっくり、遊んでやるよ」

一瞬見えたサングラスの奥は驚くほど冷たかった。

逃げたい、と体の全部が叫び出す。本能レベルのその叫びに、僕は震えるユキちゃん存在と「こいつに負けるはずがない」という確証のない思いだけで逆らった。

美園の足が僕の方へと踏み出す。草がさわりとこの場に似つかわしくない優しい音を立てた。

「お前ほどの奴がウサギなんぞとじゃれ合ってるなんてさ、とんだ笑いだね。ちょっと失望したぜ」

くすくすと不愉快な笑いを混ぜる美園が、僕の前で立ち止まった。
「ウサギなんて、玩具だろ？ 玩具は確かに『遊ぶ』ものだけだよあ

」

美園の手が、痛みで動けない僕の頭を掴んで地面に叩きつける。
背中から倒れこんで仰向けにされた僕は、視界が歪みそうになるの

を奥歯を食いしばって堪えた。

顔を驚づかみにされた指の隙間から美園の薄ら笑いが見える。

「——『じゃれ合う』ものじゃねえんだよ、慧羅」

僕の頭から離れた手は少しの間品定めするように宙を泳いで、それから僕の服にかかった。

何をされるか容易に予想できた僕は一瞬息をつめてその手をあらん限りの力で掴んだ。

「いつてえな——」

「黙れ下衆」

「じゃあ先にあっちのウサギちゃん殺してあげようか」

「な……っ！」

黙りこんだ僕に美園が嬉しそうに笑みを深めて、服に爪を立てる。布が裂ける音と共に痛みが走った。こいつ、皮膚まで裂きやがった……。見上げた美園が笑ってるところを見ると、どうやらわざとのようなのだ。苛つく。

「この……っ、糞狐！」

「なんとでもいいなよ。楽しみにしてたからねえ……こんな日をさ」
煩わしい音は絶え間なく響いて、美園の爪が徐々に僕の血で染まっていく。

抵抗は出来ない。そんなことすればユキちゃんは一瞬で肉の塊になるだろう。でも、何もしないのは惨めだった。

「ちく、しょう……っ、絶対、殺してやる……！」

口だけでも抵抗する僕に美園は獲物を見るとときと変わらない目で笑う。

「出来るもんならどうぞ」

美園の手が僕の首をなぞった。丁寧な指使いが逆に不快感生み、不覚にもびくりと跳ねてしまった体に向かって、僕は小さく舌打ちする。

喉の奥で笑った美園が、そんな僕に噛み付くように口付けた。
「んぐッ!？」

あまりにも唐突だったせいか反応が遅れた僕を見て、美園は笑いながら舌を差し入れる。

嫌悪感に鳥肌が立つのが自分でも分かった。くそっ、男にこんなことされるなんて一生の不覚だ。

ぬるぬると動く舌が気持ち悪くて、僕は生温いそれに思い切り歯を立てた。

「ッ、！」

ばっ、と口を離れた美園の唇の端から赤い筋が垂れる。

ついでに唾でも吐いてやりたかったけど自分にかかってくるだろうから止めておいた。思ったより冷静になれてるようだ。

お返しとばかりに嘲るような笑みを浮かべてやった。

「牙が丸くて残念だよ。前だったら殺せたのに」

「このッ、」

美園の手が僕の首を掴む。よほどイラついたのか震えていた。

この状態ならすぐにでも死ぬだろうな。なんて、どこか他人事だに思っていたその時。

「おにーちゃんから離れるおお——ッ！」

鈍い音と共に、ユキちゃんが美園に体当たりするのが見えた。

突然の出来事と重さに美園の手が緩む。その隙に僕はさっきのお返しとばかりに美園の腹を蹴り上げた。

「ぐ、っ」

さっきとは逆に蹲った美園を見ることさえせずに僕はユキちゃんの腕を引く。

視界の端に立ち上がるのが映ったってことは、大したダメージはないだろう。くそ、昔ならもつと躊躇なくやれたに違いないのに、鈍ったか。

自分の弱さにイラつきながらも、僕はユキちゃんを背中に抱えた。
「逃げるよー！」

「う、うんっ」

追いつかれても仕方ないだろうと思いつつも、僕は全力で逃げる覚悟で立ち上がる。

「糞がッ、逃がすかよ!」

キレた怒号が後ろで響いた。速度じゃ圧倒的にこっちが不利だろう、そりゃそうだ。

舌打ち混じりで足を踏み出したその瞬間、僕の隣を何かが駆け抜けて行った。

「え———?」

気のせいじゃなければ、随分と見慣れた、ちよつと不自然な耳だったと思う。でもそんな馬鹿な。

踏み込むのと同時に後ろを確かめた僕は目を見開いた。

「メア!？」

分類ならばウサギに入るであろう彼が、美園を殴るところが丁度視界に入る。

「早く行け!」

「で、でも……っ」

ウサギじゃキツネには敵わない。そんなこと誰だっけ知ってるのに。

「いいから行け、馬鹿狼ッ!」

「馬鹿はどっちだよ! ウサギが何やってんのさ!」

叫ぶように言った僕にも、メアは振り返らなかった。殴られた美園が地面に唾と一緒に血を吐くのが見える。

何を言っただって、メアは聞きやしないだろう。なら、僕は——
——行くしかない。

「死ぬんじゃないぞ、馬鹿ウサギ!」

泣きそうになるのを堪えて、僕は駆け出した。

信じるしかないだろう。止めようとしたって無駄なんだから、それなら信じたほうがいくらかマシだ。

ユキちゃんを安全なところまで連れて行ったら、死ぬ気で戻って

くればいい。

自分を納得させながら走り出した僕の耳に、メアの声が小さく届いた。

——俺が死ぬわけねえだろ、馬鹿狼。

本当にそう確信してるかのように、自信に満ちた声で。

n e x t .

第12話（前書き）

再度殴ったり蹴ったり。

第12話

もしも『ただの』ウサギだったら狐に立ち向かおうだなんて馬鹿なこと考えもしないだろう。

それも、狼である蒼巳が敵わなかった相手に立ち向かおう、だなんて、馬鹿にも程がある。

大切な存在を助けるために仕方なくやったことだとしても、せいぜい自分を犠牲にして時間を稼ぐ、くらいが妥当だ。

けれどもメアは、美園の足止めをするどころか、条件さえ合えば殺してやろうとすら思っていた。

ウサギでは狐に勝てない。それは誰にだって分かることだ。しかも狼の蒼巳が、万全の状態で臨んでも勝てるか怪しい相手ならば、結果は決まっている。

でもそれは、メアが『ただの』ウサギであつたなら、の話なのだ。ただの、無害で、何の力も持たない弱い存在ならば、の話なのだ。本当に忌々しい、けれども今だけはそうも言っていられない、むしろ感謝しなければならぬ。

この血に。あの親に。この、力に。

メアは自身の、少し珍しい不恰好な耳に一瞬触れて、湧き上がる不快感に大きく舌を打った。

苛立ちからその金目を細めたメアの視線の先で、美園が殴られて切れた唇を拭う。

拭われた唇と手の甲の間で、血が淡く滲んだ。掠れた色で拭った手についた血を見つめていた美園の唇は、不意ににたりと、綺麗な弧を描いてみせる。

「玩具にしちゃやるじゃねえか」
ウサギ

「……そりゃどうも」

明らかに見下した笑みを浮かべる美園に不快感を露にして、皮肉をこめた礼を返した。

相手は狐だが、恐怖は無かった。そんなものよりも、大切なものを傷つけられた怒りの方が何倍も大きい。

もし、もしも恐怖があるとするならば、それは自分自身に対してだ。

こいつと殺り合っても「自分」を保てるかという、恐怖だけ。

反吐が出る、と誰に対してなのかも分からない色で呟かれた声は、聞くつもりが無かったのか美園には届かなかった。

少しふらつきつつも意識ははつきりとした目でメアを見つめながら、美園は下卑た笑みをその端正な顔に浮かべる。

「にしてもウサギが狼なんかかくまって楽しいか？ 寝首かかれるかしんねえんだぜ？」

ああ、それとも、鎖でもなんでもつけて「ソーユープレイ」でもするために飼ったとか？

メアどころか、蒼己さえも見下すようにして吐き捨てた美園に、メアはぎり、と奥歯を噛み締めた。

「アイツはそんな奴じゃねえよ」

声に出さなくても分かるほどに不快感と軽蔑を滲ませて言い切ったメアの言葉に、今までへらへらと笑っていた美園の顔から笑みが消えた。

赤い半透明のサングラスから覗いた瞳には、明確な殺意が浮かんでいた。

「……ウサギに何が分かるってんだ」

これまでの軽薄さが嘘のように底冷えする声がメアの耳に届いた次の瞬間、視界から美園が消えた。

驚くべき速度で繰り出された蹴りを辛うじて目の端で残像だけ捕らえて、ぎりぎりの反射でそれを避ける。

顔の数ミリ前を薙いでいった足を見送った後に、外したことで苛立ったらしい美園の舌打ちが響いた。

続けざまに飛んできた拳をこれまた反射的に片手で受け止めてみせると、今度は打って変わって目の前の美園の顔に見て分かるほどの驚きの色が浮かんだ。

「てめえ、……なんだ？ 何者だ？」

得体の知れないものを見るような目で問いを口にする美園に自嘲気味に笑って、空いている片手に思い切り体重を乗せて彼を殴り飛ばした。

濁った音が響いてからすぐ、体ごと美園が吹き飛ぶ。

僅かばかり痛みを訴える殴ったほうの手をひらひらと振りながら、メアはただただ単調に、酷く冷えた声で呟いた。

「何者、ね……。んなもん知るかよ」

あの人は教えてくれなかった。

ぎり、と噛んだ奥歯が鳴る音と共に、苦々しい思い出がゆっくりと記憶の底のほうから浮かび上がってくるのが、ぼんやりと分かった。

自分が覚えている頃にはもう、母は群れの中で孤立していた。確か六歳の頃だったと思う。

群れから離れた場所に家を建て、少し遠くの森から木の実やらを集めて来る日々。父は居らず、母と自分は2人きりだった。

それでも母は寂しいだとか苦しいだとかの弱音らしいものを一切吐かなかったし、自分も幼心にそういうことを言っではいけないのだ悟っていた。

時折、この離れた家の近くでも同年代のウサギを見かけることがあったけれど、話しかけてはいけけないのだと分かっていった。

——自分と彼らが、違うものだから。

彼らの瞳は黒かった。けれども自分のそれは、見まごうことなき金色だ。自分の耳は彼らのように丸くはないし、何よりよく見れば色も違っていた。

ただそれだけのことだけれど、この大きな森の中ではそれはとても異質なことで、だから自分は彼らに話しかけてはいけなかった。自分は、彼らとは絶対に相容れないものだから。

それでも、そう思っているのも寂しいものは寂しかったし、出来るものなら友人だってほしかった。

まだ何も知らなかったからこそ、分からなかったからこそ、そんなことを思っていたのだろうと今なら分かる。

自分は絶対に彼らと一緒にいてはいけけない。彼らに、ウサギに近づいてはいけけない。

幼いころは知っていたが理解していなかったそのことを、体で、心で痛感したのは十五の時だった。

ひとりで何もかもこなさなければならぬ母が過労のせいで倒れてしまい、その代わりに自分が木の実や草を取りに行っていた時のことだ。

冬に入るころだったからかもうほとんど草は生えていなくて、高いところにある木の実をできる限り集めて袋に詰める。

落ちているものも拾って、後はこれを持って帰って母に渡すだけ、となったそのとき。

普段ならば母と自分以外は誰も入ってこないこの森に、見知らぬ子ウサギが数匹遊んでいるのが見えたのだ。

おそらくはまだ、大人たちにここへ入ってはいけけないと教わって

いなかったのだろう。

どうして村のウサギたちが母を毛嫌いしていたのかは分からなかったが、それはまさに徹底した毛嫌いぶりで、彼らは子供たちにも母を、そして自分を避けることを強いていた。

そんな中で、紛れ込んできた子ウサギたち。彼らからこちらは見えていないのか、落ちている葉や木の実で遊んでいる。

その光景をはっきりと認識した瞬間、メアの心臓は驚くほど早い速度で鼓動を打ち始めた。

昔、幾度かこんな風にして遊んでいるウサギを見たことがある。そのときも胸が高鳴った。それは、「仲良くなれたらいい」だとか「羨ましい」だとかいう感情での胸の高鳴りだった。

だが、これは違う。緊張でもない。期待でもない。恐怖でもない。無意識に唾を飲み込んで鳴った喉の音が、やけに大きく聞こえた。彼らはまだ気づかずに遊んでいる。自分はそれを眺めて、胸を高鳴らせている。緊張でも期待でも恐怖でもないもので。

嫌な汗が、背を伝った。

これはなんだ。これは、この感情は、頭の奥が甘くしびれるような、この、快感ともいえる感覚は、感情は、衝動は、なんだ？

俺はなにをしたいんだ？ 近づきたい？ 触りたい？ 話をしたい？ 違う、それじゃ足りない、そんなんじゃ、この渴きは、飢えは、—— ああ、そうだ。

食ってしまいたいんだ。

それに気づいた瞬間、全身の血が沸騰するような熱さと、心が凍りつくような寒さが同時にメアを襲った。

袋を握り締める手が震える。喉の奥に絡みつくような渴きが酷く鬱陶しくて、涙が出そうになった。

食べてしまいたい、彼らを。八つ裂きにして、ぐちゃぐちゃにして、骨に残るものもないくらい徹底的に。

これは、この感情は「異常」だ。ウサギがウサギに、同族に大して持つような感情ではない。

村の仲間が母を毛嫌いする理由が分かった気がした。

同時に、今まで気にも留めていなかったようなことが、まるで証拠のように頭の中に突きつけられる。

なぜ自分の爪は母のと違って幾分鋭いのか、なぜ自分の歯は他のウサギと少し違っているのか、なぜこんなにも体の成長が早く、しかも他と比べて大きいのか。

そしてどうして、目の色が黒ではなく金色なのか。気づいてしまった。分かってしまったのだ。

あまりの恐怖と嫌悪感に、呼吸することすら忘れた。そうして、ウサギたちを視界から追い出すようにして踵を返して走り出した。走って、走って、走って、少し泣いた。

怖くて仕方がなかった。今まで同族だと思っていた者たちを食べてしまいたいと願った自分が、怖くて仕方なかった。

それからどうやって家に帰ったのかは覚えていない。

ただ、事のすべてを話したあとに、母親が酷く優しい声で「出て行くわ」と告げてきたのは覚えている。

私がいると辛いでしよう。そういつて、辛そうな顔と優しい声で笑った母は、引きとめようとするメアを置いて出て行った。

置いていかれた、見捨てられたことは、はつきり言ってかなりのショックだった。

けれども同時に、どうしようもなく安堵したのも本当のことだった。

部屋に入った瞬間から、むせ返るようなその匂いに、唾液が止まらなかったのだ。母の、ウサギの匂いに。

もしも出て行ってもらえなかったら、自分は最愛の母を食い殺し

ていただろう。

だからこれで良かったのだ。母は充分すぎるほど尽くしてくれた。愛してくれた。メアが一人でも生きていけるように、いろいろなことを教えてくれた。だから、良いのだ。

そんな風に自分を無理やり納得させて、メアはひとりで生活し始めた。

すぐに伸び始める鋭い爪を切って、牙を削って、おいしいのかおいしくないのか分からない草や木の実を食べて、ウサギのように生活した。

そうすることだけが、自分を保たせてくれた。ウサギのふりをして生活する、ただそれだけがメアの救いになった。

食べたい食べたいと、草とは別のものを要求する体から己を救ってくれる、唯一のものが、それだったのだ。

爪を削り、牙を削り、味の分からないものを食べ続ける、それだけが――……

「――喧嘩の最中に呆けてやがるたあいい度胸だなあつ、ああ！？」

一人どっぴりと過去に浸っていたメアは、美園の怒鳴り声ではつと顔を上げた。

だがそれは美園を相手取るには遥かに遅い反応で、首筋を思い切り、押すようにして掴まれたメアは、そのまま美園の手で後ろの木へと叩きつけられた。

「ッ、はっ」

鋭い爪がいくつか首に食い込み、叩きつけられた頭は痛みにくぐらと視界を歪ませ始める。

呼吸の苦しさで胸の辺りから込み上げてくる重い吐き気に、顔が歪んだ。

氣い抜くと吐くだろうな、なんてどこか他人事のように思った瞬間、血まみれの美園の、歪んだ笑顔が見える。

「遊ぼうかと思ったけど止めた。てめえは今ここでぶっ殺す」

「……っ、ぐっ、」

息苦しさに視界がぶれていく。このままでいれば、言葉通り本気で殺されるのは分かりきっていることだった。

ひゅうひゅうと、自分のものかそれとも美園のものか分からない息がこぼれる。

そうして、ぐ、と美園の指に力が籠った瞬間、メアは首を絞めてくるその腕を横から強く掴んだ。

歪む視界の中で、その掴んだ腕を力任せに引き剥がす。途中、首の皮が抉られるのが分かったが氣にも留めなかった。

「っ、な……っ？」

目を見開いた美園は、掴まれたままの腕とメアをただ呆然と眺めて、口を開ける。

想像もしなかったのか随分と間抜けな顔を見せる美園に、メアは神経を逆なでするような笑みを浮かべて見せた。

「てめえがどれほど強いのかなんて知らねーし、興味ねえ」

冷えた声は、ゆっくりと、けれど確実にメアの苛立ちと殺意を美園へと伝えていく。

「けどな、」

膨れ上がった殺氣はまるで刺すような勢いで美園に向けられた。

「俺がお前より強いってのは、知ってたんだよ」

純粹な憎悪と殺意だけが込められた金色の目が、美園を捉えた瞬間、彼の背にはどつと冷や汗が滲んだ。

逃げる、と本能が叫びだす。

逃げる、逃げる、逃げる、逃げなければ俺は、
死ぬ。

金色。それが美園の見た最後の色だった。

n
e
x
t
.

第13話

ユキちゃんを抱えたまま走るのは流石に辛く、家についた時には大量の汗と疲労が僕を襲っていた。

渴きを訴える喉で荒い呼吸を繰り返しながら、家の戸口へとユキちゃんを下ろす。

汗に塗れた手をそつと離すと、彼はそのまん丸の瞳で不安そうに僕を見上げてきた。胸元で握り締めた手が、微かに震えている。

先ほどの恐怖がまだ抜けきっていないのだろう。当然だ、あんな状況で恐怖を感じないわけがない。ましてやユキちゃんは子ウサギで、相手は自分の母親を殺した狐だったのだから。

改めて考えてみると、このままユキちゃんを放置してメアのところへ駆けつけるなんて出来ない、とも思えた。

それでも、メアはウサギだし、相手はあの美園だ。ユキちゃんが放っておけないなら、向こうだって放っておけない。

「……ごめんね、すぐ戻ってくるから」

そう判断して、荒い息の合間から搾り出すように言えば、ユキちゃんは一瞬、目を見開いて、すぐさまそれを伏せた。

自分の中の恐怖と戦っているのか、ぎゅ、と唇に歯を立てる。躊躇うように睫が震えた後、彼はゆっくりと、けれども深く頷いてくれた。

「……………」ごめん」

項垂れるように下げられた頭を優しくなぞてから、僕はすぐさま

森へと踵を返したのだった。

家に戻ってくるときは無我夢中だったから随分と早く感じた。逆に、不安と焦燥に追い立てられるようにして走る今はとても長く感じる。

ユキちゃんを助けたときと同じように草を掻き分け枝を倒して、僕は森の中を駆けていた。

どうか無事でありますように。勝ってほしくも、負けてほしくもない。ただ、無事であることだけを強く願う。

不安のせいか知らずの内に強く噛んでいた唇に息苦しさを感じて、大きく口を開けた。

その瞬間、突然強烈な匂いを感じ取って、僕は思わず足を止めてしまった。踏みつけた草が、くしゃりと鳴る。

「……これは、……」

むせ返るような生温い血の匂いが、僕の鼻を襲っていた。

まさか、と思い浮かんだ最悪の想像に、心臓が驚くほど大きく、早く鼓動を立てていく。身体的な理由とはまったく違った汗がじんわりと背中を伝った。

メアのものでなければいい、と思うと同時に美園のものであるはずがない、という思いが首をもたげる。

性格こそ嫌っていたものの、あいつの腕は買っていたのだ。その美園が負けるとは、思えなかった。

どくどくと嫌な速度で脈打つ心臓を押さえつけるようにして、僕は大きく肩を上下させながら深呼吸をする。

落ち着け、まだ、わからないじゃないか。早く行けば助かるかもしれないじゃないか。だから、早く行かないと。

僕は胸を押さえつけていた拳をゆっくりと解いて唾を飲み、足に力を込めて再び走り始めた。

近づくにつれて一層濃くなっていく血の匂いに軽く頭痛さえ覚えながらも先ほど逃げ出してきたその場所へたどり着いた僕は、そこに広がる光景に絶句した。

無残にもなぎ倒された木の残骸が血の海へと散らばり、いくつも波紋を作る。

そして、草さえも真っ赤に染めているその海を中心に、両手を赤に濡らしたメアがひとり、こちらに背を向けて立っていた。

ぼたりぼたりと、両手から真っ赤な雫が垂れていく。

そこに、美園はいなかった。メアだけが、血の海の中で、両手を海と同じ色に染めて立っている。

何が起こっているのか想像も出来なかった。ただ漠然と、「美園が負けた」ことだけを僕は悟る。

心臓が、ユキちゃんを抱えて走っていたときよりも、メアの安否を気遣っていたときよりも早い速度で鼓動を打ち始めていた。

しかし驚くほど早く熱い鼓動とは裏腹に、心は急激に冷めていく。

凍らせられた、というほうが正しいだろう。

それほどまでに、この状況は異常だった。

大きな音を立てて飛び込んできたのだから気づいていないはずがない。メアは沈黙したまま、振り返らない。対した僕も、何もいえない。

痛い沈黙が、その場に落ちた。小動物はもちろん、草木さえも音を立てない、嫌な沈黙。

「……………メア」

それでも何も言わないわけにはいかなくて、僕は震える体を抱きしめるように脇腹に手のひらを食い込ませて、ゆっくりと唇を開いた。

返事はない。いつもならば、振り返ってくれるはずなのに。

冷や汗が、雫となって僕の頬を伝った。

「……………メア、聞こえてる？」

ぴちゃん。メアの手の甲から指先を流れた赤いそれが、血の海に落ちて音を立てた。

メアの背が、ひくりと震える。

僕の声が届いたのか、それともその音に呼び起こされたのか、理由はわからないが反応を示したメアにそつと息を吐いて、僕は足を踏み出した。

「……………メア、大丈夫？」

「……………」

一步一步、メアへと近づいていった、そのとき、今まで僕に背を向けていたメアが、くるりと振り返った。

「つ……………」

瞬間、普段の強い眼光が嘘のように深い暗闇が、僕を———飲み込んだ。

その目には恐怖も嫌悪も、悪意もなかった。なのに体が震える。逃げ出したくなる。ただただ深いだけの、感情のない瞳が、どうしようもなく恐ろしく感じて、僕は思わず後ろへ下がってしまった。

た。

そんな僕に気づいたメアは、その真つ暗な目を隠すように目線を逸らすと小さく、か細い声で呟いた。

「……殺してない。……逃げただけだ」

「逃げ、た？」

唐突な言葉に一瞬反応が遅れるが、それが美園のことを指しているのだと気づいてすぐに、辺り一面に作られた血の海へ目をやった。この血の量で、逃げられるのだろうか。逃げた、というよりは逃がしたというほうが正しい気がする。

でも、どうして逃がしたりしたんだ？ 別に殺してほしいわけではないけれど、あいつが倒せるのならば、逃がす必要はなかったと思う。

わざわざ罪を犯すとわかっているものを逃がす理由は、なんだろうか。

なんて考えていた僕は、不意にこの場に充滿しているものの中にひとつ、異質なものがあることに気づいて体をこわばらせた。

急いで目の前のメアを見上げるが、伏せられたその金の目は、いつまで経っても僕を見ようとしなない。

「……メア」

震えた声で呼びかけると、メアは微かにびくりと跳ねて、半歩下がった。

小さな拒絶に僕の思考が一瞬止まる。頭の中はもう、破裂寸前だった。何が起こっているのかわからない。ぐるぐると頭を埋め尽くすそれを、吐き出さなければ、と思う。そうしなければ、知恵熱でも起こしそうだ。

「……メア、何があつたの」

問いかけると、メアは緩く首を振って答えることを拒否した。垂れる紅い雫だけが、メアから音を立てる唯一のものになる。その拒絶が、僕の焦燥感をさらに強くさせた。

「……………言いたくないの？」

責める口調にならないよう、なるべく優しくなだめるように言う
と、メアは首だけで小さく肯定した。

相変わらず僕の頭の中にはさまざまな疑問が浮かび、そして消えずに流れていく。

この状況はなんなのか。美園はどうして逃げだしたのか。どうしてこの匂いの中に「これ」が混じっているのか。どうして、メアはこの状況について話そうとしないのか。

ぐるぐると回るその疑問たちを、一周二周と繰り返している内に、僕はとある結論に達してしまった。

まさか、まさかそんな、と、思いついたそれを勝手に頭が打ち消そうとするが、同時にそれを肯定する僕も出てくる。

うつむいたままのメアは、僕が息を飲んだのに気づいてか僅かにその空ろな金目で僕を見やった。そう、メアの瞳は、金色だ。ウサギではない、色だ。

僕は空いている距離をそっと縮めて、殴られて腫れてしまったメアの頬に優しく触れる。

「メア、……メア、君は、もしかして」

感じる匂いに、どこか不自然な体の意味がおぼろげにも分かってしまった僕の声は、小さく震えていた。

呟いた僕の言いたいことを悟ったのか、メアの虚ろだった瞳が見開かれた。

「もしかして、……ウサギだけじゃ、」

「やめろ———！」

泣き叫ぶように怒鳴ったメアが僕の手を弾いて、ふらつきながら2、3歩逃げるように距離を取る。

その目は、得体の知れないものへの恐怖で染まっていた。

言いかけた僕の言葉は、その場に留まることなく消えてゆく。それなのに、僕の心に浮かんだ想像はメアの反応で確信へと変わって

しまった。

「……メア、」

「やめろ、俺のせいじゃない、俺は悪くない、俺だって嫌だったんだ、好きで、好きでこんなになっただけじゃ、だからやめてくれ、言っただけなんだ、俺が、悪いわけじゃないのに、っ、」

「メア！」

血塗れの手で、メアは自分の頭を抱えてその場に蹲る。動き続ける唇から嗚咽が零れるのが小さく聞こえた。

そっとメアの前に座り込む。

「メア、ごめん。もう、もう言わないから」

やまない小さな声に、胸が痛んだ。

「ごめんね、ごめん。もう言わない」

重力に従った紅い雫は、手のひらからメアの頬を伝って、地面へと落ちていった。

メアの声は、続いている。

僕はそっと、その頭を撫ぜた。一瞬びくりと大きく跳ねる、メアの体。

「……帰ろう。手、洗って、それで帰ろう？ ユキちゃんも待ってるよ」

髪を撫で付けるように手を動かしていると、しばらくの沈黙のあとに、メアがゆっくり顔を上げた。

「……わ、るい」

その声は、酷く弱弱しくて僕の胸を刺す。

「いいよ、別に。僕もごめんね」

メアを落ち着かせようと苦笑した僕の意図に気づいたのか彼は申し訳なさそうにそっと目を伏せた。

「絶対、いつか話すから。……俺から、きちん、と……話すから」

「うん。待ってるよ」

僕の返事に安堵したのか、メアは1つ息を吐いてから立ち上がる。その目はいつも通りと言う訳でもないけどさっきほど暗くもなくて、

僕はとりあえず安心した。

立ち上がって、少しふらつくメアの手を取る。

「川、向こうだよ。まだ万全ってわけじゃないでしょ？ 少しくらい体重かけたっていいからね」

「……………ほんと、……………悪いな」

「別にー。僕なんて2回もメアに運んでもらってますからー」

場を和ませたくてわざと拗ねて言うのと、察してくれたメアは一瞬の間の後に「そーいやそうか」と小さく笑った。

それに重ねて「その節はお世話になりましたー」なんて返せば、またメアから笑いが零れて、「これからもお世話になるんだろ」って返ってくる。

ああ良かった。いつものメアだ。少し無理やりに作った雰囲気だけど、それでも、いつものメアだ。

そんなことに酷く安堵して、僕はメアの手を引いていったのだった。

n e x t .

第13話（後書き）

この次の話から少しだけ美園の番外編になります。

読まなくても支障がないよう書くつもりですが、これから先のひと悶着がちらつと分かったりするかもしれません。

ふえれっと！ 1（前書き）

注意！ 美園は、受けです（なんてこと言っただ駄目な方は番外編は飛ばしといてください。
多分3話ぐらい続きます。

大丈夫な方はどうぞ。

ふえれつと！ 1

例えばこのどうしようもない感情に名があったとして、そしてそこにそれなりの理由があったとしよう。

仮に、の話だから結局何も変わりやあしないんだけだな。

このどうしようもない感情はただの衝動で、その衝動には過去に何かあっただの何だのとかいう理由はまったくなくて、俺は至って悩みもなく健康的。

つまり俺がウサギ相手にあそこまでイラついて、あそこまでのぶる理由なんてモノはまったくもって『本能』以外の何物でもないのだ。

だからなんで殺したかなんて聞かれたって困るだけなんだよ。

ぽつぽつと、粘ついた紅が肩から腕を伝って落ちていく。

割れたサングラス越しにどこか他人事のようにそれを眺めながら、俺は足を引きずるようにして歩いていた。

垂れていく紅は、地面につく前に草にからめとられて真っ赤な道を敷いていく。

空気がやけに湿っぽい上に土臭いから、早く休める場所を見つけないと雨が降り出すだろう。

「くっそ、ッ」

舌打ちに混せて呟いた言葉はもう何度目か。声にしたところで何

にもならないのが分かっていながら、俺は呟くのを止められなかった。

それもこれも、あのウサギもどきのせいだ。

忌々しい面と一緒にあの時の化け物じみた殺気まで思い出しかけて、俺は急いでそれを掻き消した。

心なしか尾が震えたのは気付かなかったふりをする。

この俺が、ウサギなんぞに…怯えただなんて、一生の恥だ。

屈辱と苛立ちで奥歯に力を込めて噛むと、緩くなっていたのか痛みと共に鉄の味がじわりと広がった。…最悪だな。

そこら辺に血と一緒に唾を吐いた俺の頬に、ぽつりと冷たいものが触れた。

「…ッ、」

あつという間に強さを増してきた雨に再び舌打ちして、俺はせめて塗れないように傍の木の下に腰掛ける。

小さくため息を吐いた俺の頭上で、俺の姿を見たせいか五月蠅い駒鳥が逃げるように飛び去った。

叩きつけるような雨を眺めながら、まあ少なくともこれのおかげでそこら辺についた血は流されるだろう、となんとかいい方向へ考えようとする。

今他の奴らに見つかるのはあまり良いことではないことぐらい、誰が見ても明らかだ。

だったら雨が降ったのは逆に好都合と考えた方が気は楽になる。

もう一度息を吐くと、俺は切り裂かれた肩を押さえて抱えた膝の上に頬を乗せた。

葉を叩く音が、ひたすらに俺の耳を撫でる。やかましいはずのその音が酷く柔らかく聞こえて、俺はだんだん暗くなっていく視界に逆らうこともしないで意識を手放した。

「…あ？」

目を開くと、ぼんやりとした視界の中で火の爆ぜる音が小さく聞こえてきた。

とうとう『あっち』の世にでも行っちゃったか？なんて笑えない冗談を言葉にせずに呟いた俺は、身体を起こそうとして激痛に顔を歪める。

見ると肩には丁寧に巻かれた布。奥にちらりと見えた緑から察するに、薬草か何かが塗りこまれてるらしい。

どうみてもこれは……いや、でもこの森で俺をわざわざ助けるような奴なんているのか？

いったい誰が、と目を肩から上げた俺は、ぱちぱちと小さく爆ぜる火越しに扉が開くのを見た。

ゆっくりと開いた扉の奥にいたのは、

「……起きたんですね」

微笑を浮かべて立っていたのは、ぱつと見イタチだった。でも俺の知っているイタチはこんなに白くない。

混乱しつつ近づいてきたそいつを見上げていると、そいつは手に持っていた箱を俺のすぐそばに置いて、自分もその隣へ座った。

「狐の、美園さんですよ」

「…ああ」

「噂は聞いてますよ。初めまして、フェレットの雨葉つれはです」
「ふえれつと？」

なんで俺を助けた、だとか、聞きたいことはたくさんあったはずなのに、俺はこいつが言った自分の種に聞き覚えが無かったので間抜けな声でそれを復唱してしまった。

目の前の、雨葉と名乗ったフェレットはイタチと同じ大きさの、
だがあいつらより遥かに白い耳をひくりと揺らして苦笑する。

「簡単に言えば外来種です。この森には、俺しかいません」

聞いたことはないでしょうね、と笑った雨葉に俺はなぜだがばつ
が悪い思いになった。

俺がこんな思いする必要なんざどこにもないっていうのに。
雨葉が脇に置いた箱から布を取り出しながら俺の肩に触れかけた
ので、俺は知らずの内に距離を取ってしまった。

「……自分でやるのは、少しきついと思いますよ」

「…だらうな」

「触られるのは、お嫌ですか？」

「どっちかっていえばお前の喋り方のほうが『お嫌』だね」

皮肉を込めて言つてやると、雨葉は一瞬その透き通るような黒い
瞳に呆けたような色を宿して俺を見つめてくる。

そしてそのあとにくすくすと笑って、長く細い尾をふるりと揺ら
した。

「すみませんね、癖なんです」

「癖、ねえ」

「ええ。こうしていると、——人畜無害に見えるでしょう？」

うつすらと細められた瞳の奥が、怪しく光る。

その視線に、俺はもしかしたら助けられたんじゃないかも知れな
いと背筋が冷えたがなんとか誤魔化して笑みを浮かべた。

サングラスがないせいか、誤魔化しづらい感じは否めない。

「ホントは人畜無害じゃねえってか、危ねえ奴」

「あなたを助けた時点で、充分危ないと思いますけどね」

「……ところで、なんで俺を助けた？」

獲物と見た動物は散々痛めつけてから殺す俺の噂は、ほとんどの奴が知っているはずだ。

それにさっきもこいつは「噂は聞いてます」と言っただじゃないか。こんな俺を助けるなんて馬鹿な真似をする奴がいるだなんて思いもしなかったし、思わなかったからさっきの雨に至極イラついたというのに。

訝しむ俺に、雨葉はにっこりと笑ってとんでもないことを吐きやがった。

「あなたが好きなんですよ、美園さん」

「……は？」

ぴしりと固まった俺をよそに、雨葉は嬉々として俺の肩に巻いてあった布を取り始めたのだった。

あれから3日。

3日前の土砂降りは未だその跡を残していて、3日も経ったというのに小さな水溜りは太陽光を反射して輝いていた。

そして俺は、未だにあの馬鹿フェレットの家に住んでいる。

血が止まった瞬間に出て行こうとした俺を笑顔のまま腕を掴んで引き止めた（怪我はしているとはいえあんなひよろいのに止められるとは思わなかった、ショックだ）雨葉はせめてサングラスが直るまではここにいてください、と『脅迫』した。

あれは確実に脅迫だ。お願いじゃない。脅迫だ。目が怖かった。天下の美園様もあんなのにビビるようじゃおしまいだな、とぼんやり思う。

自分より下の動物にビビる日がくるなんて、と思ったところで、ウサギにつかまった拳句齒と爪を削られた狼が頭を掠めて、俺は小さく舌打ちした。

あいつもこんな気分だったんだろうか。

「美園さん」

ベッドに座っていた俺は、その声に顔を上げた。

扉を開いて入ってきたのは見間違う要素もなく雨葉で、俺は少しだけうんざりした。でも言わない。あの目はマジでやばいから。

「肩の包帯替えましょうか」

「…ああ」

そうそう、あの肩の布はどうやら包帯だったらしい。自前だそうなのであんなにぼろぼろなんだと。

汚い、と文句を言ったら殺されるかと思うような笑顔が返ってきたので俺はそれ以来何も言わない。

なんかこのごろ化け物じみた下級動物が増えすぎてるなあ、とぼんやり思った。

そしてこの化け物じみた下級動物は俺のことが好きらしい。なんとも恐ろしい話だ。こんなのにかれたらどうやって逃げ出せというんだ。誰か教えやがれ。

「膿んだりとかは全然してませんから、このままいけば2週間ぐらいで普通に動けるくらいにはなると思いますよ」

「そしたら出て行く」

「ええどうぞ。地の果てまで追いかけますよ、一生」

「……か、完全に治るくらいまでならいてやってもいい」
「本当ですか、嬉しいですねえ」

目がマジだった。悪寒が走った。

やっぱり俺は助けられたわけじゃないと思う。それどころか恐ろしい目にあっていると思う。

こんな目に遭うんだったらわざわざ蒼巳のところなんて行かなければ良かったかもしれない。ああでも俺は意外にもあいつのことが気に入っているから行かなかったら行かなかったで色々といらいラしてたんだろう。

気に入ってる奴ほど酷く扱うのは昔から俺の癖だった。ウサギを殺すのと同じで、特に理由はない。あっても困る。

「それにしても、狐って回復早いんですね」

「そうか？」

「ええ。それとも美園さんだけなんでしょうが」

「…多分、そうなんじゃねえの」

「じゃあ特別なんですね、美園さんは」

特別、と聞いた瞬間俺の体に変なもやもやした嫌なものが流れて、俺は小さく「全然」と返しておいた。

俺は特別なんじゃない。

特別っていうのは、もつと別の奴を言うんだと思う。

確かに俺は強いしかっこいいし（自分で言うのもなんだが）モテるし、特別っぽいけれど、それはあくまでもぼいだけであって特別じゃない。

俺は自分が全然大した奴じゃないと知ってるから、そんな俺より大したことないような奴しか殺さない。

「俺にとっては、美園さんは特別なんですがね」

「キモい」

「人の好意をキモいとはなんですかね。犯しますよ」

「……………あ……………ちよつと照れただけ」

「あ、そうですか。美園さんは照れ屋ですねえ」

口からでまかせだがやられるよかマシだし（こいつなら本気でやりかねないのだ）、こいつだって俺が照れ屋だなんて本気で思っちゃいないんだからただの軽口なのだ。「犯しますよ」は多分本気だろうけど。

ていうか俺はこいつと慣れすぎだと思う。単なるフェレットだというのに、慣れすぎだと思う。激しく思う。

『蒼巳ちゃん』もこういう風に変わっていつてしまったんだろうか。いやでも何かが決定的に違う気がする。俺は勘は良いほうだからきつとあつてるだろう。

蒼巳と俺には、今のところで決定的に違う何かがある。

それはなんだろう、と考え込みかけた俺は、「終わりましたよ」という雨葉の声に見事に思考を中断された。

「…さんきゅ」

「お礼下さいよ。いつもの」

「……………やんなきゃだめか」

「無理にとは言いませんがやらなかったらどうなるか分かりません

よ」

それを無理にというんだよこの馬鹿フェレット。という言葉は飲み込んだ。

俺は怪我してない肩の方の手で雨葉の胸倉を掴むとほんの一瞬だけ掠めるように唇をあわせてやる。なぜか知らんが手当てをしたあとに礼と称してこの行為を『強制』された。

いやまあ、それを強制するのはやっぱりこいつが俺を好きだからなんだろうけど、とぼんやり思った俺は、少しだけ頬が熱くなった気がして首を傾げた。

なんだ？　と思いつながら頬を確かめてみるもののもうとつくに熱は冷めていて、俺は再度首を傾げる。

「ありがとうございます、美園さん」

「あ、ああ……」

微笑んで雨葉が出て行った扉をしばらく見つめて考えていた俺は、何も思い浮かばなかったたのでそのままベッドにへたりと横になった。

ねくすと！

ふえれつと！ 2

おかしい、と思う。

何がおかしいかといえば、それは、あれだ。アレ。俺が、おかしい。

別に頭がおかしいわけでも顔がおかしいわけでもなく（悪いが俺はイケメンだ、超かっこいいぞ。自分で言うのもなんだがな）、なんというか、内側がおかしい。

まず、会話が上手く出来ない。誰との、とは聞くな、一人しかいないから。

それから、アレの時に、必要以上に顔が赤くなる。何の、とは聞くな、言いたくないから。

とどのつまりはおかしいのだ。俺が。否定の仕様も無い。実際におかしいのだから。

対して、あいつはほとんど何も変わらない。二週間経っても、未だに何も変わらない。治療をして、アレを頼んで、嬉しそうに笑って、それで終わり。それだけ。

ん？ 「それだけ」？ だけって何だよだけって。……なあ、だけてってなんだよ、俺。

頭を抱えて自分に問い掛けてみるが、当たり前のように答えは返ってこなかった。

最近色々考えることがあって寝不足な俺が欠伸をしつつ寝室を出ると、あいつが俺と自分のために用意している朝食の匂いが鼻を擽った。

ぼんやりとした目でそれを見とめつつ、俺は椅子に腰掛けて、あいつが皿を持ってくるのを待つ。

あいつは捕まえた鼠と、小鹿をバラして焼いていた。ああ、うん。美味そう。喉が鳴った。あいつがその音で振り返る。

「美園さん、顔洗ってきたらどうですか。もう少し時間かかりますよ」

「…眠いから良い」

べったりと頬をテーブルにつけて言えば、あいつは「そうですか」と言っただけ俺に話し掛けることはない。

毎度そうなのだ。俺が寝不足になり始めてからは、いや、その前、包帯を替えるときに会話が微妙に上手く出来なくなり始めた辺りから、あいつは必要以上の会話をあまりしなくなった。

しなくても困らないし、むしろされたとしても上手く返答できな

いからそれでも構わないけれど、これでは、二週間前の方がはるかに仲が良かった気がする。………いやいや待てよ俺、仲がいいからなんだっていうんだちくしょうが。

俺は頬をつけたまま小さく唸って、眠気に任せるように目を閉じた。まどろんだ思考の中に、あいつが肉を焼く音が入り込んでくる。心地よいその音を聞きながら俺はここ最近考えてばかりな自分の状況について再度考えてみた。

なんだかんだで、もう二週間もこんなところでぐずぐずしている。身体もほとんど治っているし、相手は別に逃げ出せないほど強いわけでもないフェレットなのに。

前に、地の果てまで一生追いかける宣言をされたけれど、本気になればたやすく逃げられるに違いないのに。

なぜだろう。どうして、俺はここから逃げ出さないんだろう。

飯がタダで食えるから？ 野宿しなくていいから？ だらけていいから？ ちょっと、違う。そういう、利便性を求めている話ではない気がする。そもそも俺ぐらいの男だったら普通にそこら辺で適当なのを引っ掛けて宿でも飯でも簡単に手に入るから、そういうのを求めている話になるわけがない。

じゃあ、どうして、俺は、ここに留まっているんだ？

毎晩のように考えて、答えの出ないそれに、俺はそつと溜め息を吐く。

その時丁度、あいつが皿に盛った焼肉を持って振り返った。気の抜けた笑みを浮かべる。

「はい、出来ましたよ」

「おー……」

「大丈夫ですか？ 最近、隈が酷いですよ」

重い身体を引きずって起きた俺がよっぽど酷い顔をしていたのか、雨葉が顔を覗き込んできた。

妙な距離の近さに、びくりと肩が跳ねる。

自分でも気付くほど大きく跳ねたのだから、目の前のこいつが気がつかないはずがない。

雨葉は一瞬だけ寂しそうに笑って、すぐにいつもの笑みを浮かべた。

え、なんだ今の。

いつでもにこやか（たまにブラック入るけど）な笑みしか浮かべない雨葉が変な顔するものだから、俺は盛大に目を泳がせる羽目になった。

なんだ、なんなんだ一体。おかしいぞ、俺。こんなことで動揺する奴じゃないだろ、俺は。

本当に、最近おかしい。今までこんな風に人と関わることが無かったから、どうしたらいいのか良く分からないのかもしれない。

あれか、こういう場合は何かいったほうがいいのか。いやでもあいつも普通の顔してるしな、だったら逆に言わない方がいいんじゃないのか？

……………ていうかそもそもこんな気を遣う必要ないだろ、なあ、俺。

なんだかよく分からないまま気まずい思いになって、俺は顔を伏せたままゆっくりと小鹿をつついだのだった。

飯を食ったら、後は基本的に自由行動だ。

俺が逃げようとしなくても分かってるのかいないのか、あいつは特に俺を監視するでもなく、好きなことをさせている。

飯の時に帰ってくれば、あとは自由にしていいと言われた。

だから俺は、飯が終われば外に出て、適当に森をぶらつく。

たまに出てくる小鳥を眺めてそいつがびくつくのを見て楽しんでみたり、わざと狸の縄張りに俺の匂いをつけてみたり、つまりは悪趣味なことをして遊ぶ。

あとは、やっぱり、今俺がいる状況について考える。最近は、暇さえあればすぐにこれだ。

多分、考えても分からないから考えちまうんだろう。答えが出ないから。

こんな複雑な感情を持ったことが今まであるだろうか。俺が今まで感じたことがある感情といえば、至極単純な、快樂とか、怒りとか、痛みとか、そういうもんだったと思う。

ここにいたって女も抱けないし、殺しも出来ないし、豪華な生活が手に入るわけでもない。

そういう欲を満たしてくれるわけでもないのに、俺がここに留まっている、俺を、ここに留まらせているものは、なんだ？

分からない。今までに感じたことがない感情を理解できるわけが無い。

俺は木漏れ日を見上げながらそつと溜め息を吐いた。

目が合った小鳥が、急いで逃げていく。

木漏れ日の間を縫うようにして飛んでいくそれを目で追うと、追われているのが分かったのか小鳥の動きが更に慌しくなった。

所々よろめきつつも、小鳥は無事飛んでいった。

「……はあ」

特に殺気を込めた覚えも無いのに、これだ。

まあ仕方ないだろう。向こうは牙も持たない小鳥で、こちらはかの有名な狐なのだから。これが普通の反応だ。食うか食われるかの世界で、凶悪な肉食獣に見つめられた場合の、しかるべき反応だ。

……だというのに、本来俺より弱い生き物であるはずのあいつは、なぜか俺に好意を持っている。

食うわけでもない獲物を快楽を得るためにだけに嬲り、まるで夕食を決めるように夜の相手を変え、男だろうが女だろうが飽きたら捨てる。まさに残虐非道、という言葉がしつくりくる俺に、惚れているとあいつは言った。

どこが好きだというのだろう。顔か、顔なのか。そこが第一候補だろうな、だって俺はあいつのこと知らなかったし、あいつだって俺のことは多分話にしかならなかっただろう。なのにどうしてそこに好意が生まれたのか。俺にはわからない。

そんなことを思いながらさくさくと草を掻き分けるように歩いて、適当な位置に腰を下ろした。

春からやんわりと夏へ移行する今の季節の日差しは、酷く心地よく降り注ぐ。

それはぼうつとしていれば寝てしまいそうになるようなものだったけれど、残念ながら今の俺の心情では目を閉じても眠気はやってこなかった。

代わりにやってくるのは、あいつの顔。ああ、くそ。

本当に、なんだっていうんだ。暇さえあれば出てくる。勝手に思考に侵入してきて、勝手に、俺に掴めない何かを与えていく。

俺は微かに苛立ちを覚えていたが、それすらもあいつに対するものではなく、この掴めない何かに対するものだ。

おかしい、なんというか、おかしい。あいつも最近おかしいけど、きつと俺のほうがもっとおかしい。

あいつに対して上手く接することができない。そもそも人と上手く接する必要のない生き方をしてきた俺がこんなことを考えている時点で、あいつに対する接し方が分かっていない。

いつものように下等生物を見下すような気持ちも沸かなければ、玩具を見つけた時のような興奮も沸いてこない。

あいつが、俺を助けたからだろうか。

残虐非道でそこら辺のゴミにも劣る畜生で性格も最悪で顔だけのような俺（我ながら切なくなってきた）を、助けてくれたからだろうか。

もしくは、あいつがこんな俺を、好きになってくれたからだろうか。

だから俺は、あいつにどう接したらいいかわからないんだろうか。好きになられた時の反応なんて肯定か否定しかないのに、それが分からないから、

なんて思った瞬間、俺の顔は火を噴く勢いで熱くなった。

「あつ…、…？」

え、なにこれ。なんですかこれ。分かりません、分かりませんよ俺には。分かってたまるかど畜生。

目を見開いて、両手で真っ赤になっているに違いない頬を包み込む。少し冷えていた手のひらを当てても、熱はまったく引かなかった。

そうだ、あいつは、こんな最悪最低のクズ野郎を好きになった。

俺は、男なのに。男なのに、特別だと、言った。告白してきた。

ああ、と呻きながら息を吐く。

俺自身の性癖のせいか、「男に好意を抱くこと」の異常性を正確に認識していなかった。

あいつにとっては俺は特別らしい。男なのに、性格最悪なのに、良いところなんて顔ぐらいしかないのに。（だから、自分で言っていて悲しくなることをいうなよ美園様よ！。俺様無敵、かつこいい、いかすー……くそ、空しくなった）

もしかしたらあいつは男好きなのかもしれないけれど、それだったらこんな性格どころか性根も腐ってる奴を選ばずに他を選べば良いわけだし（フェレットとイタチだろうが、別に異種交配なんて今時珍しくないし）、わざわざ俺を選ぶ必要はないし、ってことはつまりあいつは俺があいつの中で特別だから俺を選んだ。

そして俺は、それが嫌ではなかったから、しかも嫌ではなかったことに気づかなかったから、あいつへの接し方がまったく掴めなかったのだ。

口付けは要求するくせに会話では少し距離を置くあいつとの接し方が、分からなかったのだ。嫌いでは、なかったからこそ。

「あー……、あ、あああああー……うわあああ」

ちつくしように、滅茶苦茶恥ずかしい。天下の美園様がどこぞの乙女みたいになつてらあー、ははは………、マジ恥ずかしい。

俺はひたすらに乾いた笑いを繰り返して、両手のひらで真っ赤な頬を押さえつけ続けた。

こんな単純なことだったなんて気がつかなかった。むしろ、単純すぎて気がつかなかったのかもしれない。

俺が、ここに居座り続けているのはあいつが怖いからでも利便性

を求めているからでもなく、あいつを、嫌いではないから。

更に言うなら、あいつが――、あいつが、……言わないことにしておく。言ったら死ぬ。恥ずかしくて死ぬ。

つか、今だって滅茶苦茶恥ずかしいっつもの。

ねくすじー！

ふえれっと！ 2（後書き）

一年お待たせしました……！申し訳ありません。

こんな状態でも続きを望んで下さる方がいることに感謝です。

とりあえず三話くらいと言いましたが少し長くなりそうだったのでこ
とをお伝えしておきます。

ふえれっと！ 3（前書き）

そのまんま前回の続きです。

ふえれっと！ 3

日差しは相変わらず心地よい温度のまま俺の上から降り注いでいる。

それは確かに心地よい温度であるはずなのだけれど、今の俺には非常に暑く感じられる温度だった。

俺は蹲ったまま両手で頬を押さえつけて、ひたすらに吸って吐いてを繰り返す。

変な速度で脈打つ心臓のせいで吐き出す息は不規則なリズムを刻んでいた。息を整えるつもりがまったく逆になってしまっている。

「……………あー……………」

立ち上がることも難しい心情なので、俺は先ほどあいつへの想い（うわあこっぱずかしい何甘いこと言ってたんだ俺は）を自覚してからずっとこの場に座り込んでいる。

そんな風に、俺があまりにも普段と違う雰囲気を出しているからか、時折草の陰からちよこちよこ栗鼠が覗いてきたりしていた。そこにいるのが俺だと分かるとすぐに逃げ出していくが、大抵の小動物が俺だと気付かず近くに近くを通っていく。

殺気がないからだろ。あと、いつもの性根の悪さが表に欠片も出てないからかもしれない。

俺は頬に当てていた手を額へとずらして、逃げ場のない恥ずかしさに小さく唸った。

自覚したのは別にいい。今まで残虐非道の限りをつくしていたような俺がこんな甘ったるい恋に落ちたつてのがちょっと傍から見れば気持ち悪いぐらいで、別にそこに問題はない。

ただひとつあるとするならば、この状態で俺があいつと顔を合わせられるかどうか怪しいってことだ。

……合わせられるだろうか。

いつものように普通に会話をして、一緒に過ごして、怪我の治療を終えて、……アレが、出来るか？ 普通の顔で。普通の態度で。

——無理だ。絶対に無理だ。

今までは自覚していなかったから辛うじて普通の反応を返すことが出来ていたが、自覚した今、この思いを悟られずに過ごせる自信はない。

別に悟られたって困らないとは思うのだが、俺のプライドが何となくそれを許さなかった。まあでも、俺から言うのと、態度でバレルのだったら、言う方が何倍もマシかもしれないが。

……もしも俺がこの気持ちをそのまま言ったら、あいつは、どんな反応をするんだろう。

とりあえず、喜ぶとは思う。そりゃそうだ。好きになった相手に、「自分もそうだ」と言われたら誰だって嬉しい。俺だって嬉しい……はずだ。他の獣を好きになったことがないから分からないが、嬉しいとは思う。

「……げっ」

そういえば俺は自分以外の奴のことを好きになった覚えがなかった。大体にして、自分のことも好きかと聞かれて答えられないレベルなのだから、他人になど気を配ってられるはずがない。

つまり——、つまり俺は、あの恐ろしいフェレットが、はつこい、なのである。……初恋があれって、どうなんだよ。つか初恋とか糞恥ずかしい死にてえ。

「ねえわ、マジねえよ。くそつたれ」

女も男も食い散らかし放題の美園様が、下等生物に初恋ってなん

だ。しかも向こうは散々腹黒い笑顔で「犯す」だのなんだの言いまくってきた奴だつてのに。……そうか、あいつは俺を抱く気なのか。そうだった。

別に俺を抱こうと思うこと自体は特に気にならないのだが、美形とは言えかなり柄が悪い俺をよく抱こうと思ったものだ。

『蒼巴ちゃん』とかならまだ分かるけどな。アレは顔も良いし、性格だって、まあ、可愛い部類だ。あの化け物兎とかだったら、ぐらりと来るんじゃないだろうか。

……あー……あいつはほんと化け物だったな。二度と見たくねえ。会いたくない、のレベルを軽く凌駕している。

兎とは思えない眼光の金目を思い出した俺は先ほどの気持の高ぶりが嘘のように熱が引いてしまつて、額を覆うようにしていた手を後ろへ突いて空を見上げた。

あの化け物と出会うことになつたのは俺が白い子兎を襲おうとしていたからだ。そして俺があの子兎を襲うことになつた理由は、『蒼巴ちゃん』にある。

俺は、『蒼巴ちゃん』こと、慧羅に会いにここに来たのだ。兎に捕まつてすっかり腑抜けになつたあいつで遊ぶために。だから、あいつと住むことになつたらしい子兎に手を出した。

そんであの化け物に会つて、殺されかけて、雨葉に助けられて、告白されて、俺も好きに——くっそ死にてえ——で、今に至る。

……つまりはあれか、『蒼巴ちゃん』は俺の初恋を呼んできたキューピットかつこ笑いかつことじ、であるわけだな。なんともシュールだがそういうことだ。

ん？ ちょっと待てよ、俺はあいつ単体になら負けなかつただろうから、つまりは怪我をして雨葉に捕ま——違つた、助けられることもなかつたわけで。となると、キューピットかつこ笑いかつことじ、はあの化け物兎にならないか？

お、おお、シュールだ。シュールすぎる。大体にしてあいつの顔に兎の耳は非常に似合つてない。なんで兎なんだ、とも思うけど、

まあ、良いだろ、あれは兎であつて兎じゃないみたいなものだ。そんな風にひとり納得していた（ついでにあの殺気を思い出してげんなりしていた）俺は、不意に耳に飛び込んできた声に顔を上げた。

——つぱり止めさせて……でも相手は、——狐が——まったく面倒ごとを——……。

「ああ？」

少しここから遠い位置で、複数の低い声がなにやら話し込んでいる。

俺の声で止まらなかったことを考えると、こちらの存在には気付いていないらしい。そんなんで敵が来た時にどうするつもりだと言いたくなつたが、しょうがないな、個体差があるし、そもそも種族でも結構違うしな。

ちなみに俺の耳は個体としても種族としてもかなり性能が良い。つまりそれは、向こうの会話をしっかりはつきり聞けると言うことだ。

俺は目と一緒に耳も声の方へ向けて、その声へと耳を澄ませる。少し気になる単語があつた。「狐」という、単語。おそらく俺を指しているだろうそれに、反応するなと言う方が無理がある。

声の方へと集中すれば、ぼそぼそとしていた会話は驚くほど鮮明に聞こえてきた。

「……今まで許容してやっていただけ、このまま狐を匿い始めたら流石に放って置けないだろ」

「だな。もしかしたら、仲間として扱わなかったからその報復のためにアレを拾つたんじゃないのか？」

「……いつもへらへら笑つてるかと思つたら、機会を窺つてただけだつたってことか」

「大体、あの笑顔が嫌なんだよな。気に食わないならはつきりそういや良いんだ」

「陰険っていうか陰湿っていうか。やっぱり外来種なんて気持ち悪いだけだよ」

「どうしてこの森に来たんだか……迷惑以外の何物でもないよな……」

聞こえてきた会話は、正直聞かないほうが良かった、というぐらい胸糞が悪いものだった。

声から察するに数は、いち、に、さん。馬鹿みたいな憶測を飛ばすのがふたつ、あいつを外来種呼ばわりしたのがひとつ。

数を数えられるってことは意外にも冷静なのか、それともまだこの話を正確に認識していないのかとどちらかだと思ったのだが、どうやらひとりふたりどころか一匹二匹でも数えなかった俺はかなりキレてしまっているらしい。

単位がひとつふたつだった。笑える。あいつのことを卑下した時点で、あれらは俺にとって獲物でなくなったわけだ。

おいおい、俺重症じゃね？ 雨葉のこと言われただけでぶち切れるってどういうことだよ？ これが恋って奴ですか、そーすつか。

だが恋だろうと一宿一飯（じゃねえけど）の恩義だろうと、キレたものはいくはない。しょうがない。

俺は座り込んでいた草むらから、音を立てないようゆらりと立ち上がって、ゆっくりとその声がする方へ向かっていく。

頭にあるのはただひとつ、——『あいつらぶつ殺す。』

別に雨葉が馬鹿にされて悔しいとか差別されて苦しいとかそんなじゃない。全然これっぽっちもそんなじゃない。

ただ、俺がムカついたってだけだ。ムカついてイラついて、あいつらを食べる目的以外でぶつ殺したくなっただけだ。目玉抉って脳髓引き抜いて全身の骨を粉々にしてやりたいか思っただけだ。足音を立てないことには慣れてる。ゆっくりと、無音で進んでい

く俺の視界に、あいつとよく似た、でも少し違う茶色の耳と尻尾が見えた。

あんな薄汚いのより、あいつの白い耳の方がよっぽど綺麗だ。真っ白でふわふわしてるやつ。俺はあれが嫌いじゃない。むしろ、言うなら好きだ。ここ二週間でそうなった。

あいつらは雨葉を卑屈で陰険だと決め付けてるようだが、こんな俺を好きになってくれる奴は、よっぽど心が綺麗な奴かよっぽと歪んでる奴だ。雨葉は多分、そのどっちも持ってる。

よっぽど心が綺麗で、よっぽど歪んでる。陰険どころの話じゃない。真っ直ぐに歪んでるなんて、陰険なんぞよりよっぽど性質が悪い。けれども、それが愛しいと思う俺も充分に性質が悪い。俺に対して歪んでるなら別にいいさ。俺だって歪んでるから丁度良いぜ、多分。

俺は口元に冷えた笑みを浮かべて静かに足を進めながら、ここ最近のあいつのことを思い出してみる。

いつからか、なんとなく会話がぎこちなくなった。キスさせるときは嬉しそうなのに、どこことなく辛そうだった。

俺のせいかもしれないと思っていたが、予想が間違ってたなければこいつらのせいだ。俺を世話し始めたことで、ただでさえ孤立していたあいつは攻撃的になったんだろう。

笑っているからって、それがストレスにならないわけがないのだ。むしろ笑うことがストレスになることだである。あいつは好きでへらへらしてるわけじゃない。本音を押し殺すのに笑顔を使ってるだけだ。

こんな、種族の違いで態度を変えるやつらよりずっと大人だっただけだ。

「出て行かないまでも、視界に入らない位置にいて欲しいよな」
「そーそー、ちょっと顔が良いから調子乗ってるんじゃない？ 外来種は黙ってろって感じ」

「こつちが波風立てないようにしてるのにわざわざ問題を抱えるんだもんなあ」

「悲劇のヒーローになりたいんでしょ」

俺だつてこいつらとは違う。種族が違うからって差別したりしないぜ。差別しないで、猫も犬も梟も鷹も羊も牛も猿も猪も鹿も熊も鼠も兎もイタチも、ぶっ殺す。

ぎしぎしと齒軋りした俺は歪んだ笑みと引くつく米神を携えて、丁度あいつらと俺を遮る木から踏み出そうと足を上げた。

が、その足を下ろすより速く、何者かが俺の肩を押しつける。

「は？」

気付いた時には俺の真横を誰かが通り過ぎていて、あいつらに向かって歩み寄っていた。

木にぶつかるようにして、というか木に隠されるように押し付けられた俺は一瞬呆けて、それからぎり、と握りこぶしを作る。

誰だ？ 俺の邪魔をした奴は。ぶっ殺すぞ？ てめえもぶっ殺すぞ？

そんな風に物騒なことを考えて木の陰からそいつを覗き見た俺は、次の瞬間にそれが誰なのかを認識して、今度こそ本気で呆けた。

そいつはふわりと両手を広げて、少し小首を傾げる形でイタチに向き合いながら柔らかな声を発する。

「はい、悲劇のヒーローが登場ですよ」

背中からでは分らないが、にっこりと笑っているに違いない。いつも、俺に向けているのと同じように、にっこりと。

俺を押しつけ、苛立たせた「そいつ」はなんと、今まで散々ぼろくそを言われていた雨葉本人だった。

この場に不釣り合いなほど明るい声を出す雨葉に、俺は木の陰から半分だけ顔を出したまま間抜けな顔で固まる。

なんでお前がここにいるんだ、と思ったのは俺だけではなかったらしく、今まで陰口を叩いていたイタチみつつも、俺と同じように呆けていた。

しかしそんなことはお構いなしといった様子で、雨葉は底抜けに明るい、穏やかな声で続ける。

「いやあ、ようやく聞こえる範囲で言っただけで、嬉しい限りです。はつきりきっぱり言っている時に詰め寄らないと、駄目ですものね」
「……な、なんの話だ……」

ぐっさりと刺さる言葉に、今まで散々雨葉をこき下ろしていた気の強そうなイタチが、目を泳がせながら言う。

対して雨葉は、まるで世間話でもするかのような軽さで肩を竦めるだけだった。

「おや、しらばつくれるおつもりで？ まあそれも良いでしょう。この話を聞いていた方もいらつしやいますからどうぞせ無駄ですし」

「聞いてた奴？ 誰だよ、それ」

雨葉を外来種呼ばわりしていた、少し線の細いイタチが目だけで周囲を見回した。

が、その目に俺は入らなかったらしい。なんとも下手糞な探し方だ。雑食とは思えないほど危機察知能力が低い。

さて、ここは出て行くべきだろうか。いやでも今出て行くとちょっと間抜けだよなあ。さっき一思いに殺りに行つとけば良かった。

なんて、すっかり毒気を抜かれて殺意も何もなしに木に手を添えながら考え込んでいると、にこやかな雨葉の声が聞こえてきた。

「あなた方が先ほど言っていた、『面倒な狐』さんが証言者です」

「は、はあ!？」

「別に、め、面倒だとは言っていないだろ……!」

『面倒な狐』が傍にしていると聞いた途端その『狐』の数々の悪名を思い出したのか、イタチ達は取り繕うように口を開く。

確かに直接的に面倒だとは言われていないが、俺を預かったから放って置けない、なんて話をしていたら面倒だと言ったも同然だ。

雨葉もそう思っていたらしく、随分と神妙な態度になった男達にわざとらしいため息を吐いて首を傾けた。

「言ったも同じ、というようなことを言っていたと思いますがね」
どうやら俺の存在を出すまでもなく、今までのを全て聞いていたらしい雨葉の言葉に、イタチのひとりが唇に強く歯を立てる。

ぐう、と押し黙った男達に、雨葉が満足そうに力を抜くのがここからでも見えた。

なんていうか、聞いていたくせにわざわざ俺の存在を出す辺り、やっぱり真っ直ぐに歪んでやがるよ。

俺より性格悪いんじゃないかねえの、とたびたび疑っていたことを悶々と思い浮かべてみる。

暴力との併用効果で言うならば俺のほうがあくどい使い方をして
いるのだろうが、単に底意地と性質の悪さで言うならばあいつの方がレベルが高そうだ。

計画的というのか、逃げ道を徹底的に塞いでいく、というか。
ああそういう俺はそんな性格悪い奴に惚れられていたんだっけな、
なんて思ったそのとき。

「私のことを邪険に扱うのは構いませんが、美園さんを貶めるようなことを言うのは許せませんよ」

まさに丁度そこで、あいつは「俺に惚れている宣言」をしくさり
やがった。正確に言えばそうともとれる発言、だが、先ほどの面倒
発言然りで、言ったも同然というやつだ。

その言葉を正確に聞き取った途端、こんな状況だというのに俺の
頬は勝手に熱を集め始める。真っ赤、の一步步前辺りで止められた
が、ここまで来たら真っ赤だろうが真っ赤の一步步前だろうが一緒
だ。

やっぱり性格悪すぎんだろ。俺を押しつけて行っただから、こ
こに俺がいることぐらい分かっているだろうに。

木に添えていた手はその役割を身体を支えることに変え、俺が地
面にへたり込むのを何とかして押さえてくれた。

「……おまえ、どうしてそこまであの狐に執着する？」

「それは、どういう意味での問いでしょうか」

男の問いに、雨葉は本当に意味が分からないと言った声で聞き返し、更に続けた。

「私が美園さんを好きな理由を知りたいのか、美園さんを庇う理由を知りたいのか、どちらですか？」

「庇う理由に決まってんでしょ、誰が男同士の惚気話なんて聞いたっていうの？」

「……ああ、すみません、ちょっと良いですか」

不躰な言葉に雨葉が苛立ったのが、急激に温度を落とした声で分かった。

俺に向けられて言われたわけでもないのに背が凍る。

「なんだよ」

けれども、雨葉の笑顔しか知らないあいつらには雨葉の苛立ち具合が上手く伝わらなかったようで、まだ小生意気な態度を残したままそれに答えた。

一番小さく線の細い、年上の女性に可愛がられたり男受けしたりするような、更に言うならば前の俺が好んで陵辱していたような顔のそいつは、少し高い位置にある雨葉の顔を半ば睨むようにして見上げている。

しかしその気の強そうな顔は、雨葉が足を踏み出して近づいたことによって俺の目には入らなくなってしまった。

ゆっくりと、いつもと同じ歩幅で詰め寄った雨葉が、口を開く。

「今の私、結構機嫌が悪いんです」

「はあ？ お前の機嫌なんて知らないし」

俺ならあの状態の雨葉にあんな口聞けねえな、なんて随分弱気なことを考えながら事を見守ることにしてみる。

さて、次はどうするつもりだろうかと想像しかけたその瞬間、俺の耳に弾けるような打撃音が飛び込んできた。

急いで見てみれば、雨葉の右手が思い切り薙いだあとの状態で止

まっている。音と状況から察するに雨葉があいつの横つ面を引っぱたいてやったらしい。ざまーみるだ。

「っ、……！」

「機嫌が悪い、と言ったでしょう？　良いからその減らず口を閉じなさい」

「この……っ！　外来種の癖に、」

「それとも——、」

反抗しようとしたらしい男の言葉に被せるようにして口を開いた雨葉は、先ほど平手打ちをかました手を今度は首にかける。

木の後ろを通ってきちんと見える位置に移動してみれば、本当にいつもあのやわらかな笑顔を浮かべているあいつと同一人物なのかと疑いそうになるほど凄絶な笑みがそこにあった。

「——二度と喋れないようにこの鬱陶しい喉を潰しましょうか？」

あ、やべえ、俺移動しないほうが良かったかもしれない。

本気でそう思いたくなるような笑顔と声がそこにはあった。遠目に見ていてこの威力なのだから傍から見たあいつらは堪ったもんじやないだろう。自業自得だから同情なんて欠片もしないが、首に爪を立てられた男が目には涙を滲ませているのには少し憐れみを覚えた。この位置でもはつきり分かるほどに思い切り爪が食い込んでいる。本気で首を締め、というか喉を潰しにかかっているのだ。

「やっ、やめてくれ！　俺たちが悪かった、謝るから……」

「謝罪はいりません」

耐え切れなくなったのか懇願に走った男のひとり、雨葉は冷たい声で切り捨てた。

ぴしやりと叩きつけられた言葉に一瞬男がその顔を絶望に染めるが、それはすぐに雨葉の次の声で情けなく安堵に崩れる。

「もう二度と貴方がたが私と、美園さんにとやかく言わなければそれで結構です」

「……分かった、もう、お前らには関わらない」

「そうしてください。ちなみに言っておきますが、『こつちが波風立てないようにしてるのにわざわざ問題を抱えこ』んだのはそちらの方ですからね？」

にっこりと、いつもと同じ、けれども根底に潜む感情はまったく先ほどと変わらない笑みを浮かべる雨葉に、他の男ふたりは必死に首を縦に揺らした。

首にかかっていた手を放された男は自分の厭味を引用されて返されたことに僅かに苛立ちを見せたが、よほど首が痛むらしく歪んだ顔で患部を押さえるだけで何も言わない。

「それでは、お帰り下さい」

ただ、最後に笑顔を浮かべる雨葉を睨みつけてから、冷や汗をかき他の二人に引張られるようにしてその場を去っていった。

森の奥のほうへと小さくなっていく三人を、雨葉と俺は別々の場所と同じように眺める。

なぜか、すぐにあいつのところへ歩み寄る気にはなれなかった。

ねくすと！

ふえれっと！ 3（後書き）

なんだか書ききれなかったので一旦ここで切ります。
感想はお気軽に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7372f/>

うさっと！

2011年6月23日22時27分発行